

しんぱん  
新版

しどうようもんしゆう  
指導要文集

ひ

日めくりカレンダー  
365

ごしよべつ

御書別

あくちしき もう

あま 語

いつわ こ

ことば たく

悪知識と申すは、甘くかたらい、詐り媚び、言を巧みにし

ぐち ひと こころ と

ぜんしん やぶ

て、愚癡の人の心を取つて善心を破るといふことなり。

しょうほつくだいもくしやう

(001 唱法華題目抄 10 ページー 15 行)

ぼさつ

あくぞうとう

こころ

くふ

あくちしき

「菩薩は、悪象等においては心に恐怖なく、悪知識におい

ふい こころ しやう

あくぞう こころ

さんしゆ いた

ては怖畏の心を生ず。悪象に殺されては三趣に至らず、

あくゆう ころ

かなら さんしゆ いた

悪友に殺されては必ず三趣に至る」

りっしやうあんこくろん

(002 立正安国論 29 ー ジー 12 行)

悪侶あくりよ いましを誡いましめずんば、あに善事ぜんじを成なさんや。

(002 立正安国論りっしょうあんこくろん 30ページー11行)

しかず、彼のか万祈ばんきを修しゆせんよりは、この一凶いつきようを禁きんぜんには。

(002 立正安国論りっしょうあんこくろん 33ページー13行)

蒼蠅そうよう、驥尾きびに附ふして万里ばんりを渡わたり、碧蘿へきら、松頭しょうとうに懸かかつて千尋せんじんを延のぶ。

(002 立正安国論りっしょうあんこくろん 36ページー9行)

はや てんか せいひつ おも  
早く天下の静謐を思わば、  
すべからく国中の謗法を断つべ  
し。

(002 立正安国論 41 ページ 16 行)  
りっしょうあんこくろん

らんしつ とも まじ  
蘭室の友に交わって  
麻畝の性と成る。

(002 立正安国論 43 ページ 5 行)  
りっしょうあんこくろん

ただ我が信ずるのみにあらず、  
また他の誤りをも誠めん  
わ しん  
た あやま いまし

のみ。

(002 立正安国論 45ページー15行)  
りっしょうあんこくろん

いちねんさんぜん ほうもん  
一念三千の法門は、  
ただ法華経の本門寿量品の文の底に  
沈しりゆうじゆ てんじん  
しずめたり。竜樹・天親、知つてしかもいまだひろいだ  
さず。ただ我が天台智者のみ、これをいだけり。  
わ てんだいちしや 懐

(005 開目抄 54ページー9行)  
かいもくしょう

せけん つみ  
世間の罪によつて悪道に墮つる者は爪上の土、仏法によつ  
あくどう お もの そうじよう ど ぶつぽう

あくどう お もの じつぼう ど ぞく そう め あま おお  
て悪道に墮つる者は十方の土。俗より僧、女より尼、多く  
あくどう お  
悪道に墮つべし。

(005 開目抄 69 ページ 9 行)  
かいもくしよう

にちれん ほけきよう ちげ てんだい でんぎよう せんまん いちぶん およ  
日蓮が法華経の智解は天台・伝教には千万が一分も及ぶこ  
となけれども、難を忍び慈悲のすぐれたることはおそれを  
なん しの じひ 勝 畏  
もいだきぬべし。

(005 開目抄 72 ページ 13 行)  
かいもくしよう

いま よ み にちれん ほか しょそう 誰 ひと ほけきよう  
今の世を見るに、日蓮より外の諸僧、たれの人か、法華経に  
つけて諸人に悪口・罵詈せられ、刀杖等を加えらるる者あ  
る。日蓮なくば、この一偈の未来記は妄語となりぬ。

(005 開目抄 73 ページ 2 行)  
かいもくしょう

いま ほけきよう とき によにんじようぶつ とき ひも じようぶつ あらわ  
今、法華経の時こそ、女人成仏の時悲母の成仏も顕れ、  
だった あくにんじようぶつ とき じぶ じようぶつ あらわ きよう  
達多の悪人成仏の時慈父の成仏も顕るれ。この経は  
ないてん しょうきよう  
内典の孝経なり。

(005 開目抄 102 ページ 4 行)  
かいもくしょう

ほとけ だいば み かげ しょうじょう 離

仏と提婆とは身と影とのごとし。生々にはなれず。

しょうとくたいし もりや れんげ けかどうじ

聖徳太子と守屋とは蓮華の華菓同時なるがごとし。法華経

ぎょうじや かなら さんるい おんてき

の行者あらば、必ず三類の怨敵あるべし。

かいもくしょう

(005 開目抄 111 ページ 10 行)

かこ いん し ほつ げんざい か み みらい

「過去の因を知らんと欲せば、その現在の果を見よ。未来の

か し ほつ げんざい いん み

果を知らんと欲せば、その現在の因を見よ」

かいもくしょう

(005 開目抄 112 ページ 14 行)

詮せんずるところは、天てんもすて給たまえ、諸難しよなんにもあえ、身命しんみよを期ご  
とせん。身子しんしが六十劫ろくじつこうの菩薩ぼさつの行ぎようを退たいせし、乞眼こつげんの婆羅門ばらもん  
の責せめを堪たえざるゆえ。久遠くおん・大通だいつうの者ものの三さん・五ごの塵じんをふる、  
悪あく知識ちしきに値あうゆえなり。善ぜんに付つけ悪あくにつけ、法華經ほけきようをすつる  
は地獄じごくの業ごうなるべし。

（005 開目抄かいもくしよ 114 ページー1 行）

我われならびに我わが弟子でし、諸難しよなんありとも疑うたがう心こころなくば、自然じねんに

ぶっかい

てん かご

うたが

げんせ

仏界にいたるべし。天の加護なきことを疑わざれ。現世の

あんのん

歎

わ でし ちようせきおし

安穩ならざることをなげかざれ。我が弟子に朝夕教えしか

うたが

みな捨

拙

もの 習

ども、疑いをおこして皆すてけん。つたなき者のならいは、

やくそく

こと

とき

忘

約束せし事をまことの時はわするるなるべし。

かいもくしょう

(005 開目抄 117 ページ 7 行)

そ

しょうじゆ

しゃくぶく

もう

ほうもん

すいか

ひ

みず

夫れ、摂受・折伏と申す法門は、水火のごとし。火は水を

厭

みず

ひ

憎

しょうじゆ

もの

しゃくぶく

笑

しゃくぶく

いとう。水は火をにくむ。摂受の者は折伏をわらう。折伏

もの

しょうじゆ

悲

の者は摂受をかなしむ。

無智・悪人の国土に充滿の時は、むち あくにん こくど じゅうまん とき しょうじゆ さき 摄受を前とす。  
安樂行品のごとし。あんらくぎようほん じゃち ほうぼう もの おお とき しゃくぶく さき 邪智・謗法の者の多き時は、折伏を前  
とす。じようふきようほん 常不輕品のごとし。

（005 開目抄 118 ページ 17 行）  
かかもくしょう

「ぶつぼう えらん 仏法を壞乱するは、ぶつぼう なか あだ じな 仏法の中の怨なり。じな 慈無くして詐り  
した 親しむは、か あだ よ きゆうじ ごほう これ彼が怨なり。能く糾治せんは、ごほう これ護法の  
しょうもん しん わ でし 声聞、か 眞の我が弟子なり。か 彼がために悪を除くは、あく のぞ すなわ 即ちこ  
か おや よ かしゃく わ でし くけん れ彼が親なり。能く呵責せんは、これ我が弟子なり。驅遣せ

ざらんは、ぶつぽう 仏法の中なかの怨あだなり」

(005 開目抄かいもくしやう 120 ページー12 行)

にちれん 日蓮はにほんこく 日本国しゆのしゆにしうし父うし母うしなり。主 師 親

(005 開目抄かいもくしやう 121 ページー6 行)

みな 皆ほけきやう、法華經だいいちのゆえなれば恥はじならず。ぐにん 愚人褒にほめられたるは  
第一恥のはじなり。

(005 開目抄かいもくしやう 121 ページー11 行)

ぶつぼう とき

にちれん

るさい

こんじょう

しょうく

歎

仏法は時によるべし。日蓮が流罪は今生の小苦なればなげ

ごしよう

だいらく

受

おお

よろこ

かしからず。後生には大楽をうくべければ大いに悦ばし。

(005 開目抄 121 ページ 15 行)

かんじん

わ

こしん

かん

じつぼうかい

み

かんじん

い

観心とは、我が己心を観じて十法界を見る、これを観心と云

たと

たにん

ろっこん

み

じめん

うなり。譬えば、他人の六根を見るといえども、いまだ自面

ろっこん

み

じぐ

ろっこん

し

みようきよう

む

の六根を見ざれば自具の六根を知らず、明鏡に向かうの

とき

はじ

じぐ

ろっこん

み

時、始めて自具の六根を見るがごとし。

（006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄 125ページー6行）  
によらいのめつごこのごひやくさいにはじむかんじんのほんぞんしょう

しやくそん いんぎようかたく にほう みようほうれんげきよう ごじ ぐそく  
釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に具足す、我  
ごじ じゆじ かねん か いんが くとく ゆず あた  
らこの五字を受持すれば、自然に彼の因果の功徳を譲り与  
えたもう。

（006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄 134ページー17行）  
によらいのめつごこのごひやくさいにはじむかんじんのほんぞんしょう

じようぎよう むへんぎよう じようぎよう あんりゆうぎようとう われ こしん ぼさつ  
上行・無辺行・浄行・安立行等は我らが己心の菩薩な  
り。

（006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄 135 ページ 14 行）  
によらいのめつごこのごひやくさいにはじむかんじんのほんぞんしょう

在世の本門と末法の初めは一同に純円なり。ただし、彼は  
ざいせい ほんもん まつぼう はじ いちどう じゆんえん  
だつ しゆ 脱、これは種なり。彼は一品二半、これはただ題目の五字な  
だつ しかれ いっぽんにはん だいもく ごじ  
り。

（006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄 139 ページ 9 行）  
によらいのめつごこのごひやくさいにはじむかんじんのほんぞんしょう

正像に無き大地震・大彗星等出来す。これらは金翅鳥・  
しょうぞう な おおじしん だいすいせいとうしゆつたい こんぢちよう

修羅・竜神等の動変にあらず。ひとえに四大菩薩出現せし  
しゆら りゆうじんとう どうへん しだいぼさつしゆつげん

せんちよう

てんだい

あめ たけ

み りゆう

だい

むべき先兆なるか。天台云わく「雨の猛きを見て竜の大な

し はな さか み いけ ふか し どううんぬん

るを知り、華の盛んなるを見て池の深きを知る」等云々。

によらいのめつこのごひやくさいにはじむかんじんのほんぞんしょう

(006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄 146 ページ 12 行)

てんは

ちあき

ほつけ し

もの せほう う

天晴れぬれば地明らかなり。法華を識る者は世法を得べき

か。

によらいのめつこのごひやくさいにはじむかんじんのほんぞんしょう

(006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄 146 ページ 15 行)

いちねんさんぜん

し

もの

ほとけ

だいじひ

お

ごじ

一念三千を識らざる者には、仏、大慈悲を起こし、五字の

うち たま つつ まっだいようち くび か  
内にこの珠を裏み、末代幼稚の頸に懸けしめたもう。

（006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄 146ページー16行）  
によらいのめつこのこのひやくさいにはじむかんじんのほんぞんしょう

しよびよう なか ほけきよう ぼう だいいち じゅうびよう  
諸病の中には法華経を謗するが第一の重病なり。諸薬の  
なか なんみようほうれんげきよう だいいち ろうやく  
中には南無妙法蓮華経は第一の良薬なり。

（008 法華取要抄 155ページー1行）  
ほつけしゅようしょう

ぎやくえん みようほうれんげきよう ごじ かぎ れい  
逆縁のためには、ただ妙法蓮華経の五字に限るのみ。例せ  
ふきようほん わ もんてい じゆんえん にほんこく ぎやくえん  
ば不軽品のごとし。我が門弟は順縁なり。日本国は逆縁な

り。

（008 法華取要抄 156 ページー9 行）  
ほっけしゅようしやう

そ ぶつほう がく ほう かなら とき 習  
夫れ、 仏法を学せん法は、 必ずまず時をならうべし。

（009 撰時抄 160 ページー7 行）  
せんじしやう

か びやくほうおんもつ つぎ ほけきやう かんじん なんみやうほうれんげきやう  
彼の 白法隠没の次には、 法華経の 肝心たる 南無妙法蓮華経  
だいびやくほう いちえんぶだい うちはちまん くに くにごに はちまん  
の 大白法の、 一閻浮提の内八万の国あり、 その国々に八万  
おう おうおう しんか ばんみん いまにほんこく  
の 王あり、 王々ごとに 臣下ならびに 万民までも、 今日 日本国に

みだしょうみょう ししゆくちぐち とな 弥陀称名を四衆の口々に唱うるがごとくこうせんるふ 広宣流布せさせ  
給たもうべきなり。

(009 撰時抄 164 ページ 4 行)  
せんじしやう

いま まつぼう い ひひやくよさい だいじつきやう わ ほう なか  
今、末法に入つて二百余歳、大集経の「我が法の中におい  
てとうじやうごんしやう 鬪諍言訟してびやくほうおんもつ 白法とぎ 隠没せん」の時にあたれり。仏語  
実さだ ちちえんぶだい とうじやうお じせつ  
まことならば、定めて一閻浮提に鬪諍起せんじしやう ころべき時節なり。

(009 撰時抄 172 ページ 13 行)  
せんじしやう

にちれん えんぶだいいち ほけきよう ぎようじゃ

謗

日蓮は閻浮第一の法華經の行者なり。これをそしり、これ

怨 ひと けっこう ひと えんぶだいいち だいなん 遭

をあだむ人を結構せん人は、閻浮第一の大難にあうべし。

(009 撰時抄 175 ページ 5 行)

にちれん ほけきよう しん はじ にほんこく いったいいちみじん

日蓮が法華經を信じ始めしは、日本国には一滯一微塵のご

ほけきよう ににん さんにん じゆうにん ひやくせんまんおくにんとな つた

とし。法華經を二人・三人・十人・百千万億人唱え伝うる

みようかく しゆみせん だいねはん たいかい

ほどならば、妙覺の須弥山ともなり、大涅槃の大海ともな

ほとけ 成 みち 求

るべし。仏になる道は、これよりほかに、またもとむるこ

となかれ。

009 撰時抄 205 ページ 9 行  
せんじしやう

わ で しとう こころ ほけきやう しんみやう 惜 しゆぎやう  
我が弟子等、心みに法華經のごとく身命もおしまはず修行  
して、この度仏法を心みよ。  
たびぶつぽう こころ

009 撰時抄 210 ページ 1 行  
せんじしやう

そ ろうこ つか 後 はくき もうほう おん 報  
夫れ、老狐は塚をあとにせず、白亀は毛宝が恩をほうず。  
畜生すら、かくのごとし。いおうや人倫をや。  
ちくしやう 況 じんりん

010 報恩抄 212 ページ 7 行  
ほうおんしやう

ぶつきょう

習

もの

ふぼ

ししやう

こくおん

忘

仏教をならわん者の、父母・師匠・国恩をわするべしや。

だいおん

報

この大恩をほうぜんには、

かなら

ぶつぽう

習

極

ちしや

必ず仏法をならいきわめ智者

かな

とならで叶うべきか。

ほうおんしやう

(010 報恩抄 212 ページー9 行)

あさ

やす

ふか

かた

しやか

しよはん

あさ

さ

浅きは易く深きは難しとは、釈迦の所判なり。浅きを去つて

ふか

つ

じやうぶ

こころ

深きに就くは、丈夫の心なり。

ほうおんしやう

(010 報恩抄 235 ページー12 行)

にほんないしかんど がっし いちえんぶだい ひと うち むち 嫌

日本乃至漢土・月氏・一閻浮提に、人ごとに有智・無智をきら

いちどう たじ 捨 なんみようほうれんげきよう とな

わず一同に他事をすてて南無妙法蓮華経と唱うべし。この

広 いちえんぶだい うち ほとけ めつご

こといまだひろまらず。一閻浮提の内に仏の滅後

にせんにひやくにじゅうごねん あいだ いちにん とな にちれんいちにん

二千二百二十五年が間、一人も唱えず。日蓮一人、

なんみようほうれんげきよう なんみようほうれんげきようとう こえ 惜 とな

南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経等と声もおしまわず唱うる

なり。

（010 報恩抄 261 ページ 4 行）  
ほうおんしょう

にちれん じ ひ こうだい

なんみようほうれんげきよう

まんねん

ほかみらい

日蓮が慈悲曠大ならば、南無妙法蓮華経は万年の外未来ま

流

にほんこく

いつさいしゅじよう

もうもく

開

くどく

でもながるべし。日本国の一切衆生の盲目をひらける功德

むけんじごく

みち

塞

あり。無間地獄の道をふさぎぬ。

ほうおんしよう

(010 報恩抄 261 ページ 10 行)

ごくらくひやくねん

しゅぎよう

えど

いちにち

く

およ

極楽百年の修行は穢土の一日の功に及ばず。

ほうおんしよう

(010 報恩抄 261 ページ 12 行)

ほけきよう

過

ほとけ

成

だいどう

法華経にすぎたる仏になる大道はなかるべきなり。

014 本尊問答抄 314 ページー6 行)  
ほんぞんもんどうしやう

みようほうれんげきよう とな たも

妙法蓮華経と唱え持つというとも、もし己心の外に法あり

おも まった みようほう

と思わば、全く妙法にあらず、麤法なり。

そほう

こしん ほか ほう

015 一生成仏抄 316 ページー13 行)  
いつしやうじやうぶつしやう

しゆじやう こころ 汚

「衆生の心けがるれば土もけがれ、心清ければ土も清し」

じやうど えど

ど

こころきよ

ど きよ

とて、浄土といひ穢土というも、土に二つの隔てなし、ただ

われ こころ ぜんあく

み

しゆじやう

ほとけ

我らが心の善悪によると見えたり。衆生というも仏とい

うも、またかくのごとし。迷う時は衆生と名づけ、悟る時  
まよ とき しゅじょう な さと とき  
をば仏と名づけたり。譬えば、閻鏡も磨きぬれば玉と見ゆ  
ほとけ な たと あんきよう みが たま み  
るがごとし。

(015 一生成仏抄 317 ページ 11行)  
いつしやうじやうぶつしやう

一念無明の迷心は磨かざる鏡なり。これを磨かば、必ず  
いちねんむみよう めいしん みが かがみ みが かなら  
法性真如の明鏡と成るべし。  
ほつしやうしんによ みやうきやう な

深く信心を發して、日夜朝暮にまた懈らず磨くべし。い  
ふか しんじん おこ にちやちやうぼ おこた みが  
かようにしてか磨くべき。ただ南無妙法蓮華經と唱えたと  
みが なんやうほうれんげきやう とな

まつるを、これをみがくとはいふなり。磨

(015 一生成仏抄 317ページー14行)  
いっしょうじょうぶつしやう

ぶつきやう かなら くに  
仏教は必ず国によつてこれを弘むべし。ひろ

(028 教機時国抄 479ページー9行)  
きやうきじこくしやう

なんじほとけ おも まん 幢 倒  
すべからく汝仏にならんと思わば、慢のはたほこをたお

いか つえ 捨 き  
し、忿りの杖をすてて、ひとえに一乗に帰すべし。名聞  
みやうもん

みやうり こんじやう 飾 がまん へんしゆう ごしやう 絆  
名利は今生のかざり、我慢偏執は後生のほだしなり。ああ、

恥はずべし恥はずべし、恐おそるべし恐おそるべし。

(030 持妙法華問答抄 513 ページー5 行)  
じみようほつけもんどうしよう

受うけがたき人身じんしんをうけ、値あいがたき仏法ぶつぽうにあいて、いかでか  
虚むなしくて候そうろうべきぞ。

(030 持妙法華問答抄 514 ページー8 行)  
じみようほつけもんどうしよう

されば、持たもたるる法ほうだに第一だいいちならば、持たもつ人随ひとしたがつて第一だいいちなるべし

(030) 持妙法華問答抄 516 ページー5 行)  
じみょうほっけもんどうしよう

すべからく、心を一にして南無妙法蓮華經と我も唱え他を  
すべ ころ 一つ なんみょうほうれんげきょう われ とな た  
も勧めんのみこそ、今生人界の思い出なるべき。  
すす こんじょうにんかい おも で

(030) 持妙法華問答抄 519 ページー5 行)  
じみょうほっけもんどうしよう

仏道に入る根本は信をもつて本とす。  
ぶつどう い こんぽん しん もと

(033) 法華經題目抄 (妙の三義の事) 532 ページー12 行)  
ほけきょうだいもくしよう みょう さんぎ こと

によにん ざいせ しょうぞうまつ そう いたつきい しょうぶつ いたさいきよう なか  
女人は在世・正像末、総じて一切の諸仏の一切経の中に、  
ほけきよう ほとけ 成

法華経をはなれて仏になるべからず。

ほけきようだいもくしよう みよう さんぎ こと  
(033 法華経題目抄 (妙の三義の事) 542 ページー1 行)

みよう そせい ぎ そせい もう 蘇 ぎ  
妙とは蘇生の義なり。蘇生と申すは、よみがえる義なり。

ほけきようだいもくしよう みよう さんぎ こと  
(033 法華経題目抄 (妙の三義の事) 541 ページー5 行)

ぶつ ぼう ひと きせん よ きようもん  
仏法はあながちに人の貴賤には依るべからず、ただ経文を

さき 先とすべし。身の賤しきをもつて、その法を軽んずることな  
み いや ほう かる

かれ。

(034 聖愚問答抄上 555 ページー5 行)  
しょうぐもんどうしょうじょう

已来、知恩をもつて最とし、報恩をもつて前とす。世に四恩  
このかた ちおん さい ほうおん さき よ しおん  
あり。これを知るを人倫となづけ、知らざるを畜生とす。  
し じんりん 名 し ちくしょう

(034 聖愚問答抄上 569 ページー8 行)  
しょうぐもんどうしょうじょう

一遍この首題を唱え奉れば、一切衆生の仏性が皆よば  
いっぺん しゅだい とな たてまつ いっさいしゅじょう ぶつしょう みな呼  
れてここに集まる時、我が身の法性の法報応の三身ともに  
あつ とき わ み ほっしょう ほっぼうおう さんじん

引 あらわ ひかれて い 顕れ出ずる、これを成仏とは申すなり。例せば、  
かご 籠の内にある鳥の鳴く時、空を飛ぶ衆鳥の同時に集まる、  
み これを見て かご 籠の内の鳥も出でんとするがごとし。  
なか とり な とき そら と しゅちよう どうじ あつ

(034 聖愚問答抄上 578 ページ 11 行)  
しょうぐもんどうしやうじよう

ほけきよう 法華經の法理を教えん師匠も、また習わん弟子も、久しから  
ほけきよう ずして法華經の力をもつて、ともに仏になるべし  
ちから ほとけ

(034 聖愚問答抄上 580 ページ 13 行)  
しょうぐもんどうしやうじよう

みようほうれんげきよう

しんこう

たてまつ

いちぎよう

くどく

きた

この妙法蓮華經を信仰し奉る一行に、功德として来ら

ぜんこん

うご

ざることなく、善根として動かざることなし。

しようぐもんどうしようじよう

(034 聖愚問答抄上 581 ページー2 行)

ほけきよう

ぎようじや

いの

いの

ひび

おと

おう

法華經の行者の祈る祈りは、響きの音に応ずるがごとし。

かけ からだ

添

澄

みず

つき

映

影の体にそえるがごとし。すめる水に月のうつるがごとし。

ほうしよ

みず

招

じしやく

くろがね

吸

方諸の水をまねくがごとし。磁石の鉄をすうがごとし。

こはく

ちり

取

明

かがみ

もの

いろ

浮

琥珀の塵をとるがごとし。あきらかなる鏡の物の色をうか

ぶるがごとし。

きとうしやう  
（035 祈禱抄 587 ページー5 行）

だいち 差 外 おおぞら 繫 もの しお  
大地はささばはずるとも、虚空をつなぐ者はありません、潮

満 干

ひ にし い

ほけきやう

ぎやうじや いの 叶  
のみちひぬことはありとも、日は西より出ずるとも、法華經  
の行者の祈りのかなわぬことはあるべからず。

きとうしやう  
（035 祈禱抄 592 ページー15 行）

ぶつぽう しめぎやう

ひと ことば もち

あお

仏法を修行せんには人の言を用いるべからず。ただ仰い

ほとけ きんげん 守

で仏の金言をまぼるべきなり。

（036 如説修行抄 601ページー10行）  
によせつしゆぎようしよう

まつぼう はじ ごひやくねん じゆんえんいちじつ ほけきよう こうせんるふ  
末法の始めの五百年には純円一実の法華経のみ広宣流布  
の時なり。  
とき

（036 如説修行抄 603ページー3行）  
によせつしゆぎようしよう

いちじようるふ とき ごんきようあ かたき な  
一乗流布の時は、権教有つて敵と成つてまぎらわしくば、  
じつきよう せ  
実教よりこれを責むべし。これを、撰折二門の中には、  
ほけきよう しゃくぶく もう  
法華経の折伏と申すなり。

036 如説修行抄 603 ページ 6 行

によせつしゆぎようしよう

まっほういま

とき

ほけきよう

しゃくぶく

しゆぎよう

たれ

きようもん

されば、末法今の時、法華經の折伏の修行をば、誰か經文

ぎよう

たま

たれひと

おわ

しよきよう

むとくどう

のごとく行じ給えしぞ。誰人にてても坐せ、「諸經は無得道、

だじごく

こんげん

ほけきようひと

じようぶつ

ほう

こえ

お

墮地獄の根源、法華經独り成仏の法なり」と、音も惜しま

呼

たま

しよしゆう

にんぽうとも

しゃくぶく

ごらん

ずよばわり給いて、諸宗の人法共に折伏して御覽ぜよ。

さんるい

ごうてききた

うたが

三類の強敵来らんこと疑いなし。

036 如説修行抄 603 ページ 12 行

によせつしゆぎようしよう

いちごす

ほどな

ごうてきかさ

一期を過ぐるいちごすこと、程も無ければ、いかに強敵重ごうてきかさなるとも、

たい

こころ

おそ

こころ

ゆめゆめ退する心なかれ、恐るる心なかれ。

によせつしゆぎようしよう

(036 如説修行抄 605 ページー1 行)

しみさんぎようとう

じゃしゆう

す

じつだいじよう

ほけきよう

き

四味三教等の邪執を捨てて実大乘の法華経に帰せば、

しよてんぜんじん

じゆせんがいとう

ぼさつ

ほっけ

ぎようじゃ

しゆご

諸天善神ならびに地涌千界等の菩薩、法華の行者を守護せ

ひと

しゆご

ちから

え

ほんもん

ほんぞん

みようほうれんげきよう

ん。この人は、守護の力を得て、本門の本尊・妙法蓮華経

ごじ

えんぶだい

こうせんるふ

の五字をもつて閻浮提に広宣流布せしめんか。

けんぶつみらいき

(037 顕仏未来記 608 ページー15 行)

いちみようしんによ　り　　あくえん　あ　まよ　な  
一妙真如の理なりといえども、悪縁に遇えば迷いと成り、  
ぜんえん　あ　さと　な　さと　すなわ　ほっしょう　まよ  
善縁に遇えば悟りと成る。悟りは即ち法性なり。迷いは  
すなわ　むみよう  
即ち無明なり。

（とうたいぎしやう  
038 当体義抄 614 ページー2 行）

しょうじき　ほうべん　す　ほけきやう　しん　なんみようほうれんげきやう  
正直に方便を捨てて、ただ法華経を信じ、南無妙法蓮華経  
と　な　ひと　ほんのう　ごう　く　さんどう　ほっしん　はん　げだつ　さん  
と唱うる人は、煩惱・業・苦の三道、法身・般若・解脱の三  
とく　てん　さんがん　さんたいすなわ　いっしん　あらわ　ひと　しよじゆう  
徳と転じて、三観・三諦即ち一心に顕れ、その人の所住

の処は常寂光土なり。

(038 当体義抄 617 ページー1行)

いっさいしゆじょう

一切衆生のみなならず、十界の依正の二法、非情の草木、一

みじん

みなじつかい ぐそく

微塵にいたるまで、皆十界を具足せり。

(040 小乗大乘分別抄 632 ページー1行)

しょうじょうだいじょうふんべつしょう

ほう

よ

にん

よ

ぎ

よ

ご

よ

ち

「法に依って人に依らざれ。義に依って語に依らざれ。智に

よ

しき

よ

りょうぎきょう

よ

ふりょうぎきょう

よ

依って識に依らざれ。了義経に依って不了義経に依らざれ」

ほつけしよしんじょうぶつしやう  
〔048 法華初心成仏抄 686 ページー8 行〕

いこんとう きんせつ なか ほとけ どう ほけきやう およ きやう  
已今当の三説の中に、仏になる道は法華經に及ぶ經なし  
と云うことは、正しき仏の金言なり。

ほつけしよしんじょうぶつしやう  
〔048 法華初心成仏抄 688 ページー7 行〕

ほとけ ほけきやう みみ たね かなら  
仏になる法華經を耳にふれぬれば、これを種として必ず  
仏になるなり。

ほつけしよしんじょうぶつしやう  
〔048 法華初心成仏抄 697 ページー10 行〕

とてもかくても法華経を強ほけきよういて説しき聞とかすべし。信しんぜん人ひと  
は仏ほとけになるべし。謗ぼうぜん者は毒鼓の縁えんとなつて仏ほとけになる  
べきなり。いかにしても、仏の種は法華経より外ほかになき  
なり。

(048 法華初心成仏抄 697 ページ 14 行)  
ほつけしよしんじようぶつししよう

口くちに南無妙法蓮華経と唱となえ奉たてまつる女人は、在世ざいせの童女りゆうによ・  
橋曇弥きようどんみ・耶輸陀羅女やしやだらによのごとくに、やすやすと仏ほとけになるべし

きようもん

という経文なり。

(048 法華初心成仏抄 700 ページー6 行)

ほっけしよしんじようぶつしよう

みようほうれんげきよう

われ

しゆじよう

ぶつしよう

ほんのう

たいしやく

およそ妙法蓮華経とは、我ら衆生の仏性と、梵王・帝釈

とう

ぶつしよう

しやりほつ

もくれんとう

ぶつしよう

もんじゆ

みろくとう

等の仏性と、舍利弗・目連等の仏性と、文殊・弥勒等の

ぶつしよう

さんぜ

しよぶつ

さと

みようほう

いったいふに

ことわり

仏性と、三世の諸仏の解りの妙法と一体不二なる理を、

みようほうれんげきよう

な

妙法蓮華経と名づけたるなり。

(048 法華初心成仏抄 703 ページー14 行)

ほっけしよしんじようぶつしよう

わ こしん みようほうれんげきよう ほんぞん たてまつ  
我が己心の妙法蓮華經を本尊とあがめ 奉 っ て、我が己  
しんちゆう ぶつしよう なんみようほうれんげきよう 呼 呼  
心中の仏性、南無妙法蓮華經とよびよばれて 顕れ給うと  
ほとけ い  
ころを仏とは云うなり。譬えは、籠の中の鳥なけば、空と  
とり あつ そら とり あつ かご  
ぶ鳥のよばれて集まるがごとし。空とぶ鳥の集まれば、籠の  
なか とり い くち みようほう たてまつ  
中の鳥も出でんとするがごとし。口に妙法をよび 奉 れば、  
わ み ぶつしよう かなら あらわ たも  
我が身の仏性もよばれて 必ず 顕れ給う。

ほつけしよしんじようぶつしよう  
(048 法華初心成仏抄 704 ページ 2 行)

はちまんしせん ほうぞう わ みひとり につきもんじよ  
八万四千の法蔵は我が身一人の日記文書なり。この

はちまんほうぞう わ しんちゆう はら たも いだ たも わ しんちゆう

八万法蔵を我が心中に孕み持ち、懐き持ちたり。我が身中

こころ ほとけ ほう じょうご わ み ほか おも ねが

の心をもつて、仏と法と浄土とを我が身より外に思い願

もと まよ い こころ ぜんあく えん あ

い求むるを迷いとは云うなり。この心が、善悪の縁に値つ

ぜんあく ほう つく い

て善悪の法をば造り出だせるなり。

さんぜしよぶつそうかんもんきようそうはいりゆう そうかんもんしろう

(049 三世諸仏総勘文教相廃立 (総勘文抄) 713 ページ 13

行)

だいあつく だいしんに しよう だいがん じょうじゆ けんし たま

大悪口・大瞋恚を生じて大願を成就し、賢子をもうけ給い

まさ し しんに ぜんあく つう

ぬ。当に知るべし、瞋恚は善悪に通ずるものなり。

050 諫曉八幡抄 742 ページ 1 行

かんぎようはちまんしょう

ねはんぎよう

い

いつさいしゅじよう

い

く

う

涅槃経に云わく「一切衆生の異の苦を受くるは、ことごと

によらいいちにん

く

とううんぬん

くこれ如来一人の苦なり」等云々。

050 諫曉八幡抄 745 ページ 9 行

かんぎようはちまんしょう

なんみようほうれんげきよう

もう

ひと

だいぼんてん

たいしやく

にちがつ

してん

南無妙法蓮華経と申す人をば、大梵天・帝釈・日月・四天

とう

ちゆうや

しゅご

み

等、昼夜に守護すべしと見えたり。

050 諫曉八幡抄 747 ページ 6 行

かんぎようはちまんしょう

おのおのようじんあ  
各々用心有るべし。少しも妻子・眷属を憶うことなかれ、  
けんい おそ  
権威を恐るることなかれ。今度、生死の縛を切つて仏果を遂  
げしめ給え。  
たま

(075 弟子檀那中への御状 866 ページー9 行)  
でしだんなちゆう ごじよう

しょうにん くに あ  
聖人の国に在るは、日本国の大喜にして、蒙古国の大憂な  
り。  
にほんこく だいきき もうここく だいうう

(081 滝泉寺大衆陳状 881 ページー3 行)

『一切法』とは、一切皆これ仏法なり。

(091 上行菩薩結要付囑口伝 973 ページー14 行)

「き帰」とは我われらが色しき法なり。「めい命」とは我われらが心しん法なり。色しき心しん不二ふになるを一いち極ごくと云いうなり。

(095 御義口伝 984 ページー10 行)

声こえ、仏事ぶつじをなす。

(095 御義口伝 985 ページー1 行)

いま ちれんとう たぐ むもんじせつ ねんぶつむけん ぜんてんま  
今、日蓮等の類いは、無問自説なり。「念仏無間、禅天魔、  
しんごんぼうこく りつこくぞく さけ むもんじせつ さんるい ごうてき  
真言亡国、律国賊」と喚ぶことは、無問自説なり。三類の強敵  
きた ゆえ  
の来ることは、この故なり。

(095 御義口伝 992 ページー2 行)

われ こうべ みよう のど ほう むね れん はら げ  
我らが頭は妙なり。喉は法なり。胸は蓮なり。胎は華なり。

あし きよう  
足は経なり。この五尺の身、ごしやく み みようほうれんげきよう ごじ妙法蓮華経の五字なり。

（095 御義口伝 997ページー7行）  
おんぎくでん

いま にちれん とな  
今、日蓮が唱うるなんみようほうれんげきようところの南無妙法蓮華経は、まつぼういちまんねん末法一万年の  
しゆじよう じようぶつ  
衆生まで成仏せしむるなり。

（095 御義口伝 1004ページー8行）  
おんぎくでん

いちねんさんぜん しん  
一念三千も「信」の一字より起おこり、三世の諸仏の成道も  
しん いちじ お  
「信」の一字より起おこるなり。この「信」の字、元品の無明  
しん いちじ お しん じ がんぽん むみよう

を切る利劍なり。

(095 御義口伝 1011 ページ17行)

「信」は、「疑いなきを『信』と曰う」とて、疑惑を断破する利劍なり。「解」とは、智慧の異名なり。「信」は価のごとく、「解」は宝のごとし。三世の諸仏の智慧をかうは「信」の一字なり。

(095 御義口伝 1012 ページ1行)

いま にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう しんじゆ りようのう ゆえ  
今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と信受・領納する故に、  
むじようほうじゆ ふぐじとく むじよう ほうじゆ もと おの  
「無上宝聚 不求自得（無上の宝聚は、求めざるに自ずから  
え だいほうじゆ う しん ちえ たね ふしん  
得たり）」の大宝珠を得るなり。信は智慧の種なり、不信は  
だごく いん  
墮獄の因なり。

（095 おんぎくでん  
御義口伝 1012 ページー5行）

にほんこく いっさいしゆじよう こ  
日本国の一切衆生は「子」のごとく、日蓮は「父」のごと  
ほつけふしん とが むけんたいじよう お かえ にちれん  
し。法華不信の失によつて無間大城に墮ちて、返つて日蓮  
うら にちれん こえ お ほつけ す  
を恨みん。また日蓮も、音も惜しまず法華を捨つべからずと

云うべきものを、い 靈山りょうぜんにて悔くゆることこれ有あるべきか。

(095 御義口伝おんぎくでん 1013 ページー5 行)

「宝聚ほうじゆ」とは、三世さんぜの諸仏しよぶつの万行万善まんぎようまんぜん・諸波羅蜜しよはらみつの宝たからを聚あつめたる南無妙法蓮華經なんみようほうれんげきようなり。この無上宝聚むじようほうじゆを、辛勞しんろうも無なく行功ぎようくも無なく、一言いちごんに受け取る信心しんじんなり。「不求自得ふぐじとく」とは、

これなり。

(095 御義口伝おんぎくでん 1014 ページー10 行)

いま nichiren-tou たぐ なんみょうほうれんげきよう とな たてまつ もの けじよう  
今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、化城  
そくほうしよ われ こじゆう せんごくこうや みな かいじようじゃっこう ほうしよ  
即宝処なり。我らが居住の山谷曠野、皆、皆常寂光の宝処  
なり

(095 御義口伝 1024 ページ 3 行)  
おんぎくでん

「大願」とは、法華弘通なり。  
だいがん ほつけぐつう

(095 御義口伝 1027 ページ 4 行)  
おんぎくでん

「四面」とは、生老病死なり。四相をもつて我らが一身の  
しめん しょうろうびようし しそう われ いっしん

とう しょうごん

塔を莊嚴するなり。我らが生老病死に南無妙法蓮華經と

とな たてまつ

唱え奉るは、しかしながら「四徳の香を吹く」なり。

われ

しょうろうびょうし

なんみょうほうれんげきよう

しとく か ふ

(095 御義口伝 1031 ページ 13 行)

いま にちれんとう

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉るを、当体

たぐ

なんみょうほうれんげきよう

とな

たてまつ

とうたい

れんげ

ほとけ

い

うんぬん

蓮華の仏と云うなり云々。

(095 御義口伝 1032 ページ 12 行)

おんぎくでん

ほけきよう

たも

もの

なん

あ

こころえ

たも

この法華經を持つ者は、難に値わんと心得て持つなり。さ

れば、「則そく為い疾しつ得とく 無む上じょう仏ぶつ道どう（則すなわちこれ疾とく無む上じょうの仏ぶつ道どうを得えん）」の成じょう仏ぶつは、今いま、日に蓮ち等れんの類たぐい、南なん無み妙みょう法ほう蓮れん華げ経きょうと唱となえ奉たてまつる、これなり云々うんぬん。

（095 御おん義ぎ口く伝でん 1035 ページ 7 行）

「師し子し吼く」とは、仏ほとけの説せつなり。説せつ法ぽうとは法ほつ華け、別べつしては南なん無み妙みょう法ほう蓮れん華げ経きょうなり。

「師し」とは師しし匠しょう授さずくるところの妙みょう法ほう、「子し」とは弟で子し受じうくるところの妙みょう法ほう、「吼く」とは師して弟いと共もに唱となうるところの

おんじょう

音声なり。

(095 御義口伝 1043 ページ 2 行)

によほうしゆぎよう

「如法修行」の人とは、天台・妙楽・伝教等なり。今、

にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

によほうしゆぎよう

日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉るは、「如法修行」

うんぬん

なり云々。

(095 御義口伝 1043 ページ 6 行)

あつき

「悪鬼」とは、法然・弘法等これなり。「入其身」とは、国王・

ほうねん

こうぼうとう

にゅうごしん

こくおう

だいじん ばんみんとう

大臣・万民等のことなり。

いま にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ もの

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者を、

あだ き だつみようしや いのち うば

怨むべしということなり。「鬼」とは、「奪命者（命を奪う

もの だつくどくしや くだく うば もの い

者）」にして、「奪功德者（功德を奪う者）」と云うなり。

おんぎくでん

（095 御義口伝 1044 ページー7 行）

いま にちれんとう たぐ しゆぎよう みようほうれんげきよう しゆぎよう

今、日蓮等の類いの修行は、妙法蓮華経を修行するに、

なんきた あんらく こころ う

難来るをもつて安楽と意得べきなり。

おんぎくでん

（095 御義口伝 1045 ページー4 行）

この本法を受持するは、信の一字なり。元品の無明を対治する利剣は、信の一字なり。

(095 御義口伝 1047 ページ 10 行)

無作の三身とは、末法の法華經の行者なり。無作の三身の宝号を、「南無妙法蓮華經」と云うなり。

(095 御義口伝 1048 ページ 11 行)

いま にちれんとう たぐ なんみょうほうれんげきよう とな たてまつ もの いっさい  
今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、一切  
しゅじよう ちち むけんじごく く すく ゆえ うんぬん  
衆生の父なり。無間地獄の苦を救う故なり云々。

(095 御義口伝 1056 ページー12行)  
おんぎくでん

くおん  
「久遠」とは、はたらかさず、つくろわず、もとのままとい  
う義なり。  
おんぎ

(095 御義口伝 1058 ページー12行)  
おんぎくでん

しゅぎよう むぎわっしん うたが しん い しんじん  
修行とは、「無疑曰信（疑いなきを信と曰う）」の信心のこ

となり。

(095 御義口伝 1059 ページ 2 行)  
おんぎくでん

「信」のところに「解」あり、「解」のところに「信」あり。  
しん げ しん げ  
しかりといえども、「信」をもって成仏を決定するなり。  
しん じょうぶつ けつじょう

(095 御義口伝 1060 ページ 10 行)  
おんぎくでん

悪を滅するを「功」と云い、善を生ずるを「徳」と云うな  
あく めつ く い ぜん しょう とく い  
り。「功德」とは、即身成仏なり。また「六根清浄」なり。  
くどく そくしんじょうぶつ ろっこんしょうじょう

095 御義口伝 1062 ページ12行  
おんぎくでん

「娑婆」しやばとは、堪忍世界かんにんせかいと云うなりい

095 御義口伝 1073 ページ17行  
おんぎくでん

法華経ほけきょうを持ち奉たもるをもつて一切いっさいの孝養こうようの最頂さいちようとせり。

095 御義口伝 1077 ページ15行  
おんぎくでん

桜梅桃李おうばいとうりの己々ここの当体とうたいを改あらためずして無作むさの三身さんじんと開見かいけんす

れば、これ即ち「量」の義なり。

すなわ

りよう

ぎ

(095 御義口伝 1090 ページ 9 行)

おんぎくでん

南無妙法蓮華経と唱え奉るは、自身の宮殿に入るなり。

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

じしん

きゆうでん

い

(095 御義口伝 1095 ページ 5 行)

おんぎくでん

始めて我が心本来の仏なりと知るを、即ち「大歡喜」と名づく。いわゆる、南無妙法蓮華経は歡喜の中の大歡喜なり。

はじ

わ

こころほんらい

ほとけ

し

すなわ

だいかんぎ

な

なんみようほうれんげきよう

かんき

なか

だいかんぎ

(095 御義口伝 1097 ページ 1 行)

おんぎくでん

いちねん おくごう しんろう っ

ほんらいむさ さんじんねんねん お

一念に億劫の辛勞を尽くせば、本来無作の三身念々に起こ

るなり。いわゆる南無妙法蓮華経は精進行なり。

なんみようほうれんげきよう しょうじんぎよう

(095 御義口伝 1099 ページ 16 行)

おんぎくでん

ほうとう みようほうれんげきよう ごじ

ほか な

宝塔も妙法蓮華経の五字より外はこれ無きなり。

みようほうれんげきよう み

ほうとうすなわ

いっさいしゅじよう

いっさいしゅじようすなわ

妙法蓮華経を見れば、宝塔即ち一切衆生、一切衆生即

なんみようほうれんげきよう ぜんたい

ち南無妙法蓮華経の全体なり

(095 御義口伝 1111 ページ 9 行)

おんぎくでん

ふ ぼ じょうぶつ すなわ こ じょうぶつ こ じょうぶつ すなわ  
父母の成仏は、即ち子の成仏なり。子の成仏は、即ち  
ふ ぼ じょうぶつ  
父母の成仏なり。

(096 御講聞書 1130 ページ 8 行)  
おんこうききがき

ほ けき ょう あ たてまつ なんみょうほうれんげき ょう と な たてまつ と き  
法華経に値い奉つて南無妙法蓮華経と唱え奉る時、  
ぼん の うそ く ぼ だい し ょう じ そ く ね はん たい だ つ  
煩惱即菩提・生死即涅槃と体達するなり。

(096 御講聞書 1139 ページ 13 行)  
おんこうききがき

き ゆえ たも たてまつ たも たてまつ ゆえ さんるい ごうてききた きた  
聞く故に持ち奉る、持ち奉るが故に三類の強敵来る。来  
るをもつて「現世安穩」の記文顕れたり。  
げんせあんのん きもんあらわ

(096 御講聞書 1148 ページ1行)  
おんこうききがき

せん ほけきよう ひろ げんぜあんのん ごしよう  
詮ずるところ、法華経を弘むるをもつて「現世安穩、後生  
善処」と申すなり云々。  
ぜんしよ もう うんぬん

(096 御講聞書 1148 ページ8行)  
おんこうききがき

ずいき しんじん しんじん ずいき いちねんさんぜん ほうもん  
随喜するは信心なり。信心するは随喜なり。一念三千の法門

は、しんじん信心・ずいき随喜の函はこに納おさまりたり。

(096 御講聞書 1163 ページ 3 行)  
おんこうききがき

げしゆ下種とは、おたねを下ろすなり。しゆし種子とは、じようぶつ成仏の種たねの事なり。

(096 御講聞書 1167 ページ 7 行)  
おんこうききがき

みず水のごとき行者ぎようじやと申もうすは、みず水はちゆうやふたい昼夜不退ながに流るるなり。すこ少  
しよしもやむことなし。ほけきようそのごとく法華經しんを信ずるを水みずの行者ぎようじや

とは云いうなり云々。うんぬん

(096 御講聞書おんこうききがき 1173 ページー6行)

とうせいぎゆうば  
当世牛馬のごとくなる智者ちしやどもが、日蓮にちれんが法門ほうもんをかりそめ  
にもそし毀るは、糞犬ふんけんが師子王ししおうをほえ、癡猿ちえんが帝釈たいしゃくを笑わらうに似に  
たり。

(097 善無畏三蔵抄ぜんむいさんぞうしやう 1194 ページー17行)

すで きようもん  
既に経文のごとく「悪口・罵詈」あつく めり「刀杖・瓦礫」とうじよう がりやく「しばしば

ひんずい

と

目 あ

そうろう

ほけきよう

擯出せられん」と説かれて、かかるめに値い候こそ法華経

読

そうろう

しんじん

ごしよう

頼

をよむにて候らめと、いよいよ信心もおこり、後生もたの

そうろう

もしく候。

(098 佐渡御勘気抄 1195 ページ 12 行)

さどごかんきしよう

1195

ページ 12 行

でし 持 時

していぶつか

悪

でし

よき弟子をもつときんば、師弟仏果にいたり、あしき弟子を

蓄

していじごく

墮

していそうい

たくわいぬれば、師弟地獄におつといえり。師弟相違せば、

ごと な

なに事も成すべからず。

(103 華果成就御書 1211 ページ 2 行)

けかじようじゆごしよ

1211

ページ 2 行

おのおのわ でし 名乗 ひとびと ひとり 臆 思  
各々我が弟子となのらん人々は、一人もおくしおもわるべ  
からず。

(107種々御振舞御書 しゅじゅおんふるまいごしよ 1227ページー5行)

おのおのおも き たま み ほけきよう 替 いし こがね  
各々思い切り給え。この身を法華経にかうるは、石に金を  
かえ、糞ふんに米こめをかうるなり。

(107種々御振舞御書 しゅじゅおんふるまいごしよ 1227ページー9行)

いちじょう

堀

超

じゅうじょうにじゅうじょう

超

一丈のほりをこえぬもの、十丈二十丈のほりをこうべ  
きか。

(107種々御振舞御書 1229 ページ 16 行)

いま にちれん

まつぼう

う

みようほうれんげきよう

ごじ

ひろ

今、日蓮は、末法に生まれて妙法蓮華経の五字を弘めてか

責

ほとけめつど

のちにせんにひやくよねん

あいだ

おそ

かるせめにあえり。仏滅度して後二千二百余年が間、恐ら

てんだいちしやだいし

いっさいせけん

あだおお

しん

がた

くは天台智者大師も「一切世間に怨多くして信じ難し」の

きようもん

ぎよう

たま

ひんざい

みようもん

経文をば行じ給わず。「しばしば擯出せられん」の明文は、

にちれんひとり

ただ日蓮一人なり。

（107種々御振舞御書 1235 ページ 4 行）  
しゅじゅおんふるまいごしよ

「行解ぎょうげ既に勤つとめぬれば、三障四魔さんしゅうしま、紛然ふんぜんとして競きそい起おこる」  
（107種々御振舞御書 1235 ページ 11 行）  
しゅじゅおんふるまいごしよ

釈迦如来しやくかによらいの御おんためには提婆達多だいばだつたこそ第一だいいちの善知識ぜんちしきなれ。今いまの世間せけんを見るみに、人ひとをよくなすものは、かとうどよりも強敵ごうてきが人ひとをばよくなしけるなり。

（107種々御振舞御書 1236 ページ 6 行）  
しゅじゅおんふるまいごしよ

やまい お し ひと やまい じ やまい  
病の起こりを知らざる人の病を治せば、いよいよ病は  
ばいぞう  
倍増すべし。

(107種々御振舞御書 1241ページー14行)  
しゅじゅおんふるまいごしよ

しか あじ ゆえ ひと ころ かめ あぶら ゆえ いのち がい  
鹿は味ある故に人に殺され、亀は油ある故に命を害せら  
る。女人はみめ形よければ嫉む者多し。国を治むる者は  
たこく おそ たからあ もの いのちあや ほけきよう たも もの  
他国の恐れあり。財有る者は命危うし。法華経を持つ者は  
かなら じようぶつ そうろう  
必ず成仏し候

（107 種々御振舞御書 1246 ページー16行）

ほけきよう しん ひと

法華経を信ずる人は、かまえてかまえて法華経のかたきを

ほけきよう 敵

恐 たま

おそれさせ給え。念仏者と持斎と真言師と、一切

ねんぶつしや じさい しんごんし いっさい

なんみようほうれんげきよう もう

南無妙法蓮華経と申さざらん者をば、いかに法華経をよむ

もの ほけきよう 読

ほけきよう 知

とも法華経のかたきとしろしめすべし。かたきをしらねば、

知

誑 そろろろ

かたきにたぼらかされ候ぞ。

（108 光日房御書 1255 ページー2行）

こうにちぼうごしよ

そ じんしん 受

希

夫れ、人身をうくることはまれなるなり。すでにまれなる

じんしん

ぶつぼう

人身をうけたり。また、あいがたきは仏法、これもまたあえ

おな

ぶつぼう

なか

ほけきよう

だいもく

けつく

り。同じ仏法の中にも法華経の題目にあいたてまつる。結句、

だいもく

ぎようじや

か こじゆうまんおく

題目の行者となれり。まことにまことに過去十萬億の

しよぶつ

くよう

もの

諸仏を供養する者なり。

(113 寂日房御書 1268 ページ17行)

じやくにちぼうごしよ

にちれん

にほんだいいち

ほけきよう

ぎようじや

かんじほん

日蓮は日本第一の法華経の行者なり。すでに勸持品の

にじゆうぎよう

げ もん

にほんこく

なか

にちれんいちにん

二十行の偈の文は、日本国の中には日蓮一人よめり。

(113 寂日房御書 1269 ページ 3 行)

いのちかぎ

あ

お

ねが

ぶつこく

命限り有り、惜しむべからず。ついに願うべきは仏国なり

(121 富木入道殿御返事

(願望仏国の事)

1283 ページ 11 行)

ときにゆうどうどのごへんじ

がんばうぶつこく

こと

ほとけと

い

しっぽう

さんぜんだいせんせかい

し

み

仏説いて云わく「七宝をもつて三千大千世界に布き満つる

て こゆび

ぶつきよう

くよう

しゆい

とも、手の小指をもつて仏経に供養せんにはしかず」取意。

せつせんどうじ

み

投

ぎようぼうほんじ

み

かわ

剥

雪山童子の身をなげし、楽法梵志が身の皮をはぎし、

しんみよう

す

お

ふせ

身命に過ぎたる惜しきもののなければ、これを布施として

ぶつぽう なら かなら ほとけ 成  
仏法を習えば必ず仏となる。

(122 佐渡御書 1284 ページ13行)

なんし 恥 いのち 捨 によにん おとこ  
男子ははじに命をすて、女人は男のために命をすつ。

(122 佐渡御書 1285 ページ2行)

せけん あさ しんみよう うしな だいじ ぶつぽう  
世間の浅きことには身命を失えども、大事の仏法など  
には捨つること難し。故に仏になる人もなかるべし。

(122 佐渡御書 1285 ページ6行)

ぶつぼう しょうじゆ しゃくぶくとき  
仏法は摂受・折伏時によるべし。譬えは、世間の文武二道  
のごとし。

(122 佐渡御書 1285 ページ 8 行)

ちくしょう こころ よわ 脅 つよ 恐  
畜生の心は、弱きをおどし、強きをおそる。当世の学者等  
ちくしょう ちしや よわ 悔 おうぼう よこしま  
は畜生のごとし。智者の弱きをあなずり、王法の邪を  
おそる。諛臣と申すはこれなり。

(122 佐渡御書 1285 ページ 16 行)

強敵を伏して始めて力士をしる。

あくおう

しょうほう

やぶ

じゃほう

そうとう

かとうど

ちしや

悪王の正法を破るに、邪法の僧等が方人をなして智者を

うしな

とき

ししおう

こころ

もの

かなら

ほとけ

失わん時は、師子王のごとくなる心をもてる者、必ず仏

成

になるべし。

(122 佐渡御書 1285 ページ 17 行)

おごれる者は、必ず、強敵に値っておそるる心出来する

もの

かなら

ごうてき

あ

恐

こころしゅつたい

なり。例せば、修羅のおごり、帝釈にせめられて、無熱池

れい

しゆら

傲

たいしやく

責

むねうち

の蓮の中に小身と成つて隠れしがごとし。

(122 佐渡御書 1286 ページ 4 行)

正法は、一字一句なれども、時機に叶いぬれば必ず得道なるべし。千経万論を習学すれども、時機に相違すれば叶うべからず。

(122 佐渡御書 1286 ページ 5 行)

外道・悪人は如来の正法を破りがたし。仏弟子等、必ず

ぶつぽう やぶ  
仏法を破るべし。 師子身中の虫の師子を食む」等云々。  
し し しんちゆう むし し し は とううんぬん

(122 佐渡御書 1286 ページ 7 行)

こころ ほけきよう しん ゆえ ぼんでん たいしやく おそ おも  
心は法華経を信ずる故に梵天・帝釈をもなお恐ろしと思  
わす。

(122 佐渡御書 1287 ページ 12 行)

くろがね きた う つるぎ けんしょう めり こころ  
鉄は炎い打てば剣となる。 賢聖は罵詈して試みるなる  
べし。

(122 佐渡御書 1288 ページー1行)

にちれん かこ ふきよう  
日蓮は過去の不軽のごとく、  
とうせい ひとびと か きようき ししゆ  
当世の人々は彼の軽毀の四衆  
の<sup>ひと</sup>ごとし。人は替われども<sup>いん</sup>因はこれ一なり。父母を殺せる人  
こと おな むけんじごく 墮  
異なれども、同じ無間地獄におつ。いかなれば、不軽の<sup>いん</sup>因を  
ぎよう にちれんいちにんしやかぶつ  
行じて日蓮一人釈迦仏とならざるべき。

(122 佐渡御書 1290 ページー14行)

にちれん しん  
日蓮を信ずるようなりし者どもが、  
もの にちれん  
日蓮がかくなれば、  
うたが  
疑

起

ほけきよう

捨

にちれん

いをおこして法華経をすつるのみならず、かえりて日蓮を

きようくん

われかしこ

おも

びやくにんとう

ねんぶつしや

ひさ

教訓して我賢しと思わん僻人等が、念仏者よりも久しく

あびじこく

ふびん

もう

阿鼻地獄にあらんこと、不便とも申すばかりなし。

(122 佐渡御書 1291 ページ 3 行)

さどごしよ

おのおのわ

でし

もの

ふか

よし

ぞん

しんみよう

各々我が弟子たらん者は深くこの由を存ぜよ。たとい身命

およ

たいてん

に及ぶとも退転することなかれ。

(127 法華行者逢難事 1304 ページ 3 行)

ほつけぎようじやほうなんじ

いのち もう もの いつしんだいいち ちんぽう いちにち 延

命と申す物は一身第一の珍宝なり。一日なりともこれをの

せんまんりよう こがね 過 ほけきよう いちだい

ぶるならば、千万両の金にもすぎたり。法華経の一代の

しようぎよう ちようか もう じゆりようほん 故

聖教に超過していみじきと申すは、寿量品のゆえぞかし。

(130 可延定業書 1308 ページ 9 行)

いちにち いのち さんぜんかい たから 過 そうろう おんこころざし

一日の命は三千界の財にもすぎて候なり。まず御志

見見 たも

をみみえさせ給うべし。

(130 可延定業書 1309 ページ 5 行)

にちれん ほけきよう ぎようじや  
日蓮はこれ法華經の行者なり。 不輕の跡を紹繼するの故  
に。 輕毀する人は頭七分に破れ、信ずる者は福を安明に積  
まん。

(133 聖人知三世事 1314 ページ 16 行)

み あ まん おも み くだ きよう あなど まったか  
身を挙げれば慢ずと想い、身を下せば經を蔑る。 松高けれ  
ば藤長く、 源 深ければ流れ遠し。 幸いなるかな、 楽しい  
かな。 穢土において喜樂を受くるは、ただ日蓮一人なるのみ。

(133 聖人知三世事 1315 ページ 9 行)

矢や 走はしることは弓ゆみのちから、くものゆくことはりゆう竜の  
ちからカ、おとこのしわざ夫はめのちから力なり。

(134 富木尼御前御返事 1316 ページ 7 行)  
ときあまごぜんごへんじ

わ もんけ 夜は眠ねむりを断たち昼ひるは暇いとまを止とどめてこれを案あんぜよ。  
いっしょうむな 一す生空ばんざいしく過くぎして万歳ばんざい悔くゆることなかれ。

(137 富木殿御書 (止暇断眠御書) 1324 ページ 8 行)  
ときどのごしよ し くだんみんごしよ

ほっけしゆう こころ いちねんさんぜん

しょうあく

しょうぜん

みようかく

くらい

法華宗の心は一念三千なり。性悪・性善、妙覚の位に

そな

がんぼん

ほっししよう

ぼんてん

たいしやくとう

あらわ

がんぼん

なお備われり。元品の法性は梵天・帝釈等と顕れ、元品

むみよう

だいろくてん

まおう

あらわ

の無明は第六天の魔王と顕れたり。

じびようだいししようごんじついもく

(139 治病大小権実違目 1331 ページー12行)

せけん

にほんだいいち

まず

もの

ぶつぽう

ろん

世間には日本第一の貧しき者なれども、仏法をもつて論ず

いちえんぶだいいいち

と

もの

れば一閻浮提第一の富める者なり。

しばさつぞうりゆうししよう

(141 四菩薩造立抄 1339 ページー15行)

しょうじ じょうや て だいとう がんぽん むみょう き りけん  
生死の長夜を照らす大灯、元品の無明を切る利剣は、この  
ほうもん す  
法門に過ぎざるか。

（145 諸経と法華経と難易の事 1345 ページー6行）  
しよきよう ほけきよう なんい こと

ぶつぼう たい せけん 影 たいま かげ 斜  
仏法は体のごとし、世間はかげのごとし。体曲がれば影なな  
めなり。

（145 諸経と法華経と難易の事 1346 ページー10行）  
しよきよう ほけきよう なんい こと

ねはんぎよう てんじゆうきようじゆ もう ほうもん せんごう おも こんじよう 尽  
涅槃経に転重軽受と申す法門あり。先業の重き今生につ

きずして、未来に地獄の苦を受くべきが、今生にかかる  
じゆうく あ そうち じごく くる 消 し そうち  
重苦に値い候えば、地獄の苦しみばつとききえて死に候え  
にんてん さんじよう いちじよう やく 得 そうろう  
ば、人天・三乗・一乗の益をうること候。

(150 転重軽受法門 1356 ページ 8 行)  
てんじゆうきようじゆほうもん

「この経は則ちこれ閻浮提の人の病の良薬なり。もし人  
きよう すなわ えんぶだい ひと やまい ろうやく ひと  
やまいあ 病有らんきように、この経を聞くことを得ば、病は即ち消滅  
ふろうふし して、不老不死ならん」

(151 太田入道殿御返事 1360 ページ 6 行)  
おおたにゆうどうどのごへんじ

この経の文字は、盲眼の者はこれを見ず、肉眼の者は文字  
と見る、二乗は虚空と見る、菩薩は無量の法門と見る。仏  
は一々の文字を金色の釈尊と御覧あるべきなり。「即ち仏  
身を持つ」とは、これなり。

163 曾谷入道殿御返事（文字即仏の事）

1411 ページ9行

「心の師とはなるとも、心を師とせざれ」とは、  
六波羅蜜経の文ぞかし。

163 曾谷入道殿御返事 (文字即仏の事)

1411 ページ 12 行

そやにゆうどうどのごへんじ もんじそくほとけ こと

こんど ほけきよう しんじん 取

しん

きよう ぎよう

今度、法華経に信心をとるべき。信なくしてこの経を行ぜ

て

ほうざん

い

あし

せんり

みち

くわだ

んは、手なくして宝山に入り、足なくして千里の道を企つ

るがごとし。

ちか

げんしよう

ひ

とお

しん

と

ただし、近き現証を引いて遠き信を取るべし。

164 法蓮抄 1418 ページ 13 行

ほうれんしよう

いわゆる、地獄の一人、餓鬼の一人、乃至九界の一人を仏

じごく

ひとり

がき

ひとり

ないしくかい

ひとり

ほとけ

いつさいしゆじようみなほとけ

理 あらわ

たと

になせば、一切衆生皆仏になるべきことわり顯る。譬え

たけ ふし ひと

よ ふし わ

ば、竹の節を一つ破りぬれば、余の節また破るるがごとし。

ほうれんしよう

(164 法蓮抄 1420 ページー11行)

ねはんぎよう

い

ぜんびく

ほう やぶ もの み

お

涅槃経に云わく「もし善比丘あつて、法を壞る者を見て、置

かしゃく くけん こしよ

まさ し

ひと

いて、呵責し驅遣し挙処せずんば、当に知るべし、この人は

ぶつぼう

なか あだ

よ くけん

かしゃく こしよ

わ

仏法の中の怨なり。もし能く驅遣し呵責し挙処せば、これ我

でし しん しょうもん

うんぬん

もん なか

ほう やぶ もの

が弟子、真の声聞なり」云々。この文の中に、「法を壞る者

み

お

かしゃく

お

を見て」の「見て」と、「置いて、呵責せずんば」の「置い

て」よとを能く能く心腑しんぷに染むべきなり。ほけきよう法華経の敵かたきを見ながら、お置いてせめずんば、師檀しだんともに無間地獄むけんじごくは疑うたがいなか  
るべし。

165 曾谷殿御返事 (成仏用心抄) 1434 ページ15行

いたるところの諸仏しよぶつの土どに、常つねに師しとともに生しやうず

165 曾谷殿御返事 (成仏用心抄) 1435 ページ6行

この法門ほうもんを日蓮申にちれんもうす故ゆえに、忠言耳ちゆうげんみみに逆さからう道理どうりなるが故ゆえに、

るぞい  
いのち  
およ  
徴  
流罪せられ、命にも及びしなり。しかれども、いまだこり  
そろうろ  
ず候。

（165 曾谷殿御返事（成仏用心抄） 1435 ページ14行）  
そやどのごへんじ  
じょうぶつようじんしよう

「いたるところの諸仏の土に、常に師とともに生ず」「もし  
ほっし  
しんごん  
しよぶつ  
ど  
つね  
し  
しょう  
法師に親近せば、速やかに菩提の道を得、この師に随順し  
すみ  
ぼだい  
どう  
え  
し  
ずいじゆん  
て学せば、恒沙の仏を見たてまつることを得ん」  
がく  
ごうしや  
ほとけ  
み  
え

（169 秋元殿御返事 1456 ページ9行）  
あきもとどのごへんじ

しゆ じゆく だつ ほうもん ほけきよう かんじん さんぜじつぼう ほとけ  
種・熟・脱の法門、法華經の肝心なり。三世十方の仏は、  
かなら みようほうれんげきよう ごじ たね ほとけ な たま

必ず妙法蓮華經の五字を種として仏に成り給えり。

(170 秋元御書 1458 ページー9 行)  
あきもとごしよ

さんぜんせかい み ちんぼう いのち か  
三千世界に満つる珍宝なれども、命に替わることとはなし。

(170 秋元御書 1463 ページー9 行)  
あきもとごしよ

だいろくてん まおう さいし み い おや おこと 誑  
第六天の魔王、あるいは妻子の身に入つて親や夫をたばら

かし、あるいは国王の身に入つて法華經の行者をおどし、  
こくおう み い ほけきよう ぎようじや 脅

あるいは父母ふぼの身みに入いって孝養こうようの子こをせむることあり。責責

(171 兄弟抄きょうだいしやう 1472 ページー9 行)

今生こんじように正法しやうほうを行ぎようずる功德強盛くどくじやうじようなれば、未来みらいの大苦だいくを  
招まね越きして少苦しやうくに値あうなり。

(171 兄弟抄きょうだいしやう 1473 ページー8 行)

この法門ほうもんを申もうすには、必かならず魔出来ましゆったいすべし。魔競まきそわずば、  
正法しやうほうと知しるべからず。

（171 兄弟抄きょうだいしょう 1479 ページ12行）

女人にょにんとなることは、物ものに随したがつて物ものを随したがえる身みなり。

（171 兄弟抄きょうだいしょう 1480 ページ11行）

たといいかなるわ煩ずらわしきことありとも、夢ゆめになして、た

だ法華經ほけきょうのことのみさ捌ばくたもらせ給たまうべし。

（171 兄弟抄きょうだいしょう 1481 ページ3行）

これより後も、いかなることありとも、すこしもたゆむことのち 弛  
なかれ。いよいよはりあげてせむべし。たとい命いのちに及ぶとおよ  
も、すこしもひるむことなかれ。怯

（174 兵衛志殿御返事（鎌足造仏の事）  
ひようえのさかんどのごへんじ かまたりぞうぶつ こと  
1484 ページ11行）

潮 干 満 つき い 入 なつ あき ふゆ  
しおのひるとみつと、月の出ずるといると、夏と秋と、冬と  
はる 塚 かなら そうい かなら さんしようしま もう さわ 出  
春とのさかいには、必ず相違することあり。凡夫の仏にな  
る、またかくのごとし。必ず三障四魔と申す障りいできた  
れば、賢者けんじやはよろこび愚者ぐしやは退くしりぞ、これなり。

176 兵衛志殿御返事 (三障四魔の事)

ひようえのさかんどのごへんじ さんしようしま こと

1488 ページ 4 行

ほけきよう いちじいっく とな ひと かた もう

法華経を一字一句も唱え、また人にも語り申さんものは、

きようしゆしやくそん おんつか にちれん いや み

教主釈尊の御使いなり。しかれば、日蓮、賤しき身なれど

きようしゆしやくそん ちよくせん ちようだい くに きた

も、教主釈尊の勅宣を頂戴してこの国に来れり。これを

いちごん 謗 ひとびと つみ むけん ひら いちじいっく くよう

一言もそしらん人々は罪を無間に開き、一字一句も供養せ

ひと むしゆ ほとけ くよう 過 み

ん人は無数の仏を供養するにもすぎたりと見えたり。

しじようきんごどのごへんじ ぼんのんじよう こと

195 四条金吾殿御返事 (梵音声の事) 1527 ページ 2 行

よ みだ おのおの ほけきょう じゅうらせつたす たま  
いかなる世の乱れにも各々をば法華経・十羅刹助け給えと、  
しめ き ひ い かわ つち みず もう  
湿れる木より火を出だし、乾ける土より水を儲けんがごと  
く、  
こうじよう もう  
強盛に申すなり。

(196 呵責謗法滅罪抄 1539 ページ 4 行)  
かしかくほうぼうめつざいししょう

きよう たも によにん いっさい によにん 過  
この経を持つ女人は一切の女人にすぎたるのみならず、  
いっさい なんし 超 そうつろう  
一切の男子にこえたりとみえて候。

(198 四条金吾殿女房御返事 1542 ページ 13 行)  
しじょうきんごどののにようぼうごへんじ

いっさい ひと 憎

一切の人はにくまばにくめ、釈迦仏・多宝仏・十方の諸仏、

ないしほんのう たいしやく にちがつとう

不 便 思

乃至梵王・帝釈・日月等にだにもふびんとおもわれまいら

苦 ほけきよう

せなば、なにくるし。法華経にだにもほめられたてまつりな

ば、なにかくるしかるべき。

(198 四条金吾殿女房御返事 1542 ページ 16 行)

しじようきんごどののにようぼうごへんじ

たいしろうぐんこころ 弱

大將軍心ゆわければ、したがうものもかいなし。ゆみゆわ

甲斐 弓 弱

弦 緩

ければつるゆるし、風ゆるなればなみちいさきは、じねんの

波 小 自然

道 理

どうりなり。

198 四条金吾殿女房御返事 1543 ページ 8 行

しじょうきんごどののにようぼうごへんじ

さんじゆうさん

厄

てん

さんじゆうさん

幸

たも

三十三のやくは、転じて三十三のさいわいとならせ給う

しちなん

すなわ

めつ

しちふく

すなわ

しょう

べし。「七難は即ち滅し、七福は即ち生ず」とは、これな

とし

若

ふく

重

そうろう

り。年はわこうなり、福はかさなり候べし。

198 四条金吾殿女房御返事 1543 ページ 14 行

しじょうきんごどののにようぼうごへんじ

ひ

薪

くわ

とき

盛

おおかせふ

ぐら

火にたきぎを加うる時はさかんなり。大風吹けば求羅は

ばいぞう

まつ

まんねん

齢

たも

ゆえ

えだ

曲

倍增するなり。松は万年のよわいを持つ故に枝をまげらる。

ほけきよう

ぎようじや

ひ

ぐら

法華經の行者は火と求羅とのごとし。

たきぎ

かせ

だいなん

薪と風とは大難の

ほけきよう

ぎようじや

くおんちようじゆ

によらい

ごとし。法華經の行者は久遠長寿の如来なり。

しゆぎよう

えだ

修行の枝

をきられ、まげられんこと、疑うたがいなるべし。

しじようきんごどのごへんじ

しきようなんじ

こと

(199 四条金吾殿御返事 (此經難持の事))

1545

ページー1行)

う

易

たも

難

受くるはやすく、持たもつはかたし。さるあいだ、成じようぶつ仏は持たもつ

きよう

たも

ひと

なん

あ

こころえ

たも

にあり。この經きようを持たもたん人は難なんに値あうべしと心得こころえて持たもつな

り。

しじようきんごどのごへんじ

しきようなんじ

こと

(199 四条金吾殿御返事 (此經難持の事))

1544

ページー13行)

おん 御いのりの叶い候わざらんは、ゆみ 弓のつよくしてつるよわく、  
かな そうら 弦 弱  
たち 剣 使 ひと おくびよう  
太刀・つるぎにてつかう人の臆病なるようにて候べし。  
ほうきよう おん 失  
あえて法華経の御とがにては 候べからず。  
そうろう

（200 王舎城事 1547 ページー3 行）  
おうしやじようじ

かまくらどの ごかんき にど 被  
鎌倉殿の御勘気を二度までかぼり、すでに頸となりしかど  
くび  
も、ついにおそれずして候えば、いま にほんこく ひとびと どうり  
そら  
かと申すへんもあるやらん。  
もひう 辺

（200 王舎城事 1547 ページ 12 行）  
おうしゃじょうじ

いつさいしゆじよう なんみようほうれんげきよう と な ほか ゆうらく

一切衆生、南無妙法蓮華經と唱うるより外の遊樂なきなり。

きよう い しゆじようしよゆうらく しゆじよう ゆうらく ところ うんぬん

經に云わく「衆生所遊樂（衆生の遊樂する所）」云々。

しじようきんごどのごへんじ しゆじようしよゆうらくごしよ

（203 四條金吾殿御返事（衆生所遊樂御書） 1554 ページ 6 行）

ゆうらく われ しきしん えしよう いちねんさんぜん じじゆゆうしん

「遊樂」とは、我らが色心・依正ともに一念三千・自受用身

ほとけ ほけきよう たも たてまつ ほか ゆうらく

の仏にあらずや。法華經を持ち奉るより外に遊樂はなし。

げんぜあんのん ごしようぜんしよ

「現世安穩、後生善処」とは、これなり。

（203 四条金吾殿御返事（衆生所遊楽御書）  
1554 ページー8 行）

しじょうきんごどのごへんじ しゅじょうしよゆうらくごしよ

く く 覚 らく らく 開 くらく おも あ  
苦をば苦とさととり、楽をば楽とひらき、苦楽ともに思い合わ

なんみょうほうれんげきよう 打 唱 居 たま

せて南無妙法蓮華経とうちとなえいさせ給え。これあに  
じじゆほうらく

自受法楽にあらずや。

（203 四条金吾殿御返事（衆生所遊楽御書）  
1554 ページー12 行）

しじょうきんごどのごへんじ しゅじょうしよゆうらくごしよ

にちれん 助 こころぎ ひとびとしょうしやう  
日蓮をたすけんと志す人々少々ありといえども、ある

こころ 薄 こころ 篤

いは心ざしうすし、あるいは心ざしはあつけれども、身  
み

合 期

様 々

ごへん

いちぶん

ごうごせず。ようようにおわするに、御辺はその一分なり。

こころ

ひと

勝

うえ

しんみよう

支

心ざし人にすぐれておわする上、わずかの身命をささう

おんゆえ

るもまた御故なり。

しじようきんごどのごへんじ

ちじんぐほう

こと

(205 四條金吾殿御返事 (智人弘法の事))

1562 ページ 14 行

けんじん

はつふう

もう

やつ

風

侵

けんじん

もう

賢人は、八風と申して八つのかぜにおかされぬを、賢人と申

うるお

おとろ

やぶ

ほま

たた

そし

くる

すなり。利い・衰え・毀れ・誉れ・称え・譏り・苦しみ・

たの

楽しみなり。

しじようきんごどのごへんじ

はつふうしよう

(206 四條金吾殿御返事 (八風抄))

1565 ページ 3 行

檀那し思合祈  
だんなと師とおもいあわぬいのりは、水の上みずうえに火ひをたくが  
ごとし。

(206 四条金吾殿御返事 (八風抄) 1566 ページ1行)

ねはんぎよう ほとけさいご ごゆいごん  
涅槃経に仏最後の御遺言として、『法ほうに依よって人にんに依よらざ  
れ』と見みえて候そうろう。

(207 頼基陳状 1571 ページ5行)

いっしょう

夢

うえ

あす

期

一生はゆめの上、明日をごせず。いかなる乞食にはなると

こつじき

ほけきょう

瑕

たも

も、法華經にきずをつけ給うべからず。

しじょうきんごどのごへんじ ふかしやくしよりよう こと

(208 四条金吾殿御返事(不可惜所領の事) 1583 ページ10行)

そ

ぶつぼう

もう

しょうぶ

先

おうぼう

もう

しょうばつ

夫れ、仏法と申すは勝負をさきとし、王法と申すは賞罰を

もと

本とせり。

しじょうきんごどのごへんじ

せおうごしよ

(209 四条金吾殿御返事(世雄御書) 1585 ページ7行)

鍛

金

盛

ひ

い

疾

溶

そうろう

きたわぬかねは、さかんなる火に入るればとくとけ候。

こおり 湯 い  
氷をゆに入るるがごとし。 剣つるぎなんどは、 大火たいかに入るれども、

溶と 鍛たが ゆえ  
しばらくはとけず。 これきたえる故なり。

209 四条金吾殿御返事 (世雄御書) 1590 ページー8行

ぶつぼう ぼう とうり どうり もう しゆ か  
仏法と申すは道理なり。 道理と申すは主に勝つものなり。

209 四条金吾殿御返事 (世雄御書) 1590 ページー10行

前々 ぼう

さきざき申すがごとく、 さきざきよりも百千万億倍御用心ひやくせんまんおくばいごようじん

あるべし。

(209) 四条金吾殿御返事 (世雄御書)

1590 ページ12行

にちれん わか こんじょう 祈 日蓮は少きより今生のいのりなし。ただ仏ほとけにならんと  
思 おもうばかりなり。

(209) 四条金吾殿御返事 (世雄御書)

1590 ページ14行

じんしん う 人身は受けがたし、爪つめの上うえの土つち。人身は持ちがたし、草くさの上うえ  
つゆ ひやくにじゅう たも な 腐くさの露つゆ。百二十まで持つて名をくたして死せんよりは、生いき  
いちにち な 上うへ て一日なりとも名をあげんことこそ大切たいせつなれ。

すしゅんてんのうごしよ さんしゅざいほうごしよ  
(210) 崇峻天皇御書 (三種財宝御書)  
1596 ページー6行

なかつかさのさぶろうざえものじよう しゅ おん  
ぶつぼう おん

「中務三郎左衛門尉は、主の御ためにも、仏法の御ために

せけん こころ 根

も、世間の心ねも、よかりけり、よかりけり」と、鎌倉の

ひとびと くち 謳 たま

人々の口にうたわれ給え。

すしゅんてんのうごしよ さんしゅざいほうごしよ  
(210) 崇峻天皇御書 (三種財宝御書)  
1596 ページー7行

くら たから み たから 勝 み たから こころ たから

蔵の財よりも身の財すぐれたり、身の財より心の財

だいいち おんふみ こらん こころ たから 積

第一なり。この御文を御覧あらんよりは、心の財をつませ

たも  
給うべし。

(210) 崇峻天皇御書 (三種財宝御書)

1596 ページ 9 行

いちだい かんじん ほけきよう ほけきよう しゆぎよう かんじん ふきようほん  
一代の肝心は法華経、法華経の修行の肝心は不軽品にて  
そうろう ふきようぼさつ ひと うやま

候なり。不軽菩薩の人を敬いしは、いかなることぞ。

きようしゆしやくそん しゆつせ ほんかい ひと ふ ま そうら  
教主釈尊の出世の本懐は人の振る舞いにて候いけるぞ。

あなかしこ、あなかしこ。賢かしこきを人にんと云い、はかな果無きを畜ちく

という。

(210) 崇峻天皇御書 (三種財宝御書)

1597 ページ 13 行

じょうごう もの くすりへん どく ほうけきょう どくへん くすり  
定業の者は薬変じて毒となる、法華経は毒変じて薬とな  
ると見えて候。  
み そうろう

215 四条金吾殿御返事 (石虎將軍御書) 1607 ページ15行  
しじょうきんごどのごへんじ せつこししょうぐんごしよ

ほうけきょう けん ひと もの 切  
法華経はよきつるぎなれども、つかう人によりて物をきり  
候か。  
そうろう

215 四条金吾殿御返事 (石虎將軍御書) 1608 ページ11行  
しじょうきんごどのごへんじ せつこししょうぐんごしよ

かたき

狙

ほけきよう

ごしんじんごうじよう

だいなん

敵はねらうらめども、法華経の御信心強盛なれば、大難も

予

き

そうろう

よ

よ

ごしんじん

かねて消え候か。これにつけても能く能く御信心あるべ

し。

(215 四条金吾殿御返事 (石虎將軍御書)

しじようきんごどのごへんじ

せつこししょうぐんごしよ

1609 ページ1行)

こうべ

振

髪

揺

こころ

働

み

動

おおかせふ

頭をふればかみゆるぐ。心はたらけば身うごく。大風吹け

そうもく

静

だいち

動

たいかい

騒

きようしゆ

ば草木しずかならず。大地うごけば大海さわがし。教主

しゃくそん

たてまつ

そうもく

釈尊をうごかし奉れば、ゆるがぬ草木やあるべき、さわ

みず

がぬ水やあるべき。

216 日眼女造立釈迦仏供養事  
にちげんによぞうりゆうしやくあぶつくようじ  
1610 ページ4行

陰徳あれば陽報あり  
いんとく ようほう

217 陰徳陽報御書  
いんとくようほうごしよ  
1613 ページ2行

「根ねふか深ければ枝えださかえ、源みなもと遠とおければ流ながれ長ながし」と申もうして、  
いっさい きよう ね 浅 なが 近 ほけきよう ね みなもと  
一切の経は根あさく流れちかく、法華経は根ふかく源と

おし

218 四条金吾殿御返事(源遠流長の事)  
しじょうきんごどのごへんじ げんおんりゆうちよう こと  
1615 ページ7行

ほうもん 付 ひと 数 多 そうら

この法門につきし人あまた候いしかども、おおやけ・

私

だいなんたびたびかさ

そうら

いちねんにねん

付

わたくしの大難度々重なり候いしかば、一年二年こそつき

そうら

のちのち

みな

落

返

候いしが、後々には、皆、あるいはおち、あるいはかえり

や 射

み

こころ

こころ

矢をいる。あるいは身はおちねども心おち、あるいは心は

み

おちねども身はおちぬ。

しじょうきんごどのごへんじ

げんおんりゆうちよう

こと

218 四条金吾殿御返事(源遠流長の事) 1615 ページ 8 行

しちゆうじゆう 捨

だいなん

通

ひと

によらい

つか

始中終すてずして大難をとおす人、如来の使いなり。

(218 四條金吾殿御返事(源遠流長の事) 1616 ページ17行)

仏の大難には及ぶか勝れたるか、それは知らず。

竜樹・天親・天台・伝教は余に肩を並べがたし。日蓮末法

に出でずば、仏は大妄語の人、多宝・十方の諸仏は大虚妄

の証明なり。仏の滅後二千二百三十余年が間、一閻浮提

の内に仏の御言を助けたる人、ただ日蓮一人なり。

(219 聖人御難事 1619 ページ5行)

かこ げんざい まつぼう ほけきよう ぎようじゃ きようせん おうしん ばんみん  
過去・現在の末法の法華經の行者を輕賤する王臣・万民、

はじめは事なきようにて、終にほろびざるは候わず。  
はじめは事なきようにて、終にほろびざるは候わず。

日蓮またかくのごとし。  
日蓮またかくのごとし。

(219 聖人御難事 1619 ページ10行)  
(219 しょうにんごなんじ 1619 ページ10行)

おのおの ししおう こころ と い ひと  
各々、師子王の心を取り出だして、いかに人おどすともお

ずることなかれ。師子王は百獣におじず。師子の子、また

かくのごとし。彼らは野干のほうるなり。日蓮が一門は師子

の吼うるなり。  
の吼うるなり。

(219 聖人御難事 1620 ページー1行)

しょうにんごなんじ

つきづきひび 強 たま  
月々日々につより給え。  
すこしもたゆむ心あらば、魔たよ  
りをうべし。 得

(219 聖人御難事 1620 ページー7行)

しょうにんごなんじ

われ げん だいなん あ  
我ら、現にはこの大難に値うとも、後生は仏になりなん。  
きゆうじ とうじ 痛  
たとえば灸治のごとし。 当時はいたけれど、後の薬なれ  
のち くすり  
ば、いたくていたからず。

(219) 聖人御難事 1620 ページ 12 行

しょうにんごなんじ

1620

ページ 12 行

彼かのあつわらの愚癡ぐちの者ものども、いいはげましておとすこと

なかれ。彼らかれには、ただ一えんにおもい切れ。よからんは

不思議ふしぎ、わるからんは一定とおもえ。

(219) 聖人御難事 1620 ページ 14 行

しょうにんごなんじ

1620

ページ 14 行

よからんは不思議ふしぎ、わるからんは一定とおもえ。

(219) 聖人御難事 1620 ページ 15 行

しょうにんごなんじ

1620

ページ 15 行

さきざき ようじん

健 氣

ほけきよう しんじん

前々の用心といい、またけなげといい、また法華経の信心つ

ゆえ

なん

ぞんめい

たま

よき故に、難なく存命せさせ給い、めでたし、めでたし。

そ

うん 窮

へいほう

要

かほう 尽

夫れ、運きわまりぬれば兵法もいらす、果報つきぬれば

しよじゆう

従

所従もしたがわず。

しじようきんごどのごへんじ

ほけきようへいほう

こと

(220 四條金吾殿御返事(法華経兵法の事) 1622 ページ7行)

にちれん 祈

もう

ふしん

濡

火 口

いかに日蓮いのり申すとも、不信ならば、ぬれたるほくちに

ひ 打 掛

励

ごうじよう

火をうちかくるがごとくなるべし。はげみをなして強盛に

しんりき

出

たも

信力をいだし給うべし。

220

（四 条 金 吾 殿 御 返 事（法 華 經 兵 法 の 事）  
しじょうきんごどのごへんじ ほけきょうへいほう こと

1623

ペー ジー 7 行

なにの兵法よりも法華經の兵法をもちい給うべし。

へいほう

ほけきょう

へいほう

用

たも

220

（四 条 金 吾 殿 御 返 事（法 華 經 兵 法 の 事）  
しじょうきんごどのごへんじ ほけきょうへいほう こと

1623

ペー ジー 9 行

ふかく信心をとり給え。あえて臆病にては叶うべからず

しんじん

たま

おくびょう

かな

そろうろう

候。

220

（四 条 金 吾 殿 御 返 事（法 華 經 兵 法 の 事）  
しじょうきんごどのごへんじ ほけきょうへいほう こと

1623

ペー ジー 10 行

いかに申さじと思うとも、毀らん人にはいよいよ申し聞か  
すべし。命生きて御坐しまさば、御覧あるべし。またいか  
に唱うとも、日蓮に怨をなせし人々は、まず必ず無間地獄  
に堕ちて、無量劫の後に日蓮の弟子と成つて成仏すべし。

(224 経王御前御書 1632 ページ1行)

師子王は、前三後一と申して、ありの子を取らんとするにも、  
またたけきものを取らんとする時も、いきおいを出だすこ

とは、ただおなじきことなり。日蓮にちれん、守護しゆごたるところの  
御本尊ごほんぞんをしたため参らせ候まゐことも、師子王ししおうにおとるべか  
らず。

(225 経王殿御返事きょうおうどのごへんじ 1632 ページ15行)

南無妙法蓮華経なんみょうほうれんげきょうは師子吼ししくのごとし、いかなる病やまいさわりをな  
すべきや。

(225 経王殿御返事きょうおうどのごへんじ 1633 ページ1行)

劍

進

ひと

もち

つるぎなんども、すすまざる人のためには用いることなし。

ほけきよう

つるぎ

しんじん

健

気

ひと

もち

法華經の劍は、信心のけなげなる人こそ用いることなれ。

おに 金 棒

にちれん

魂

墨

染

流

鬼にかなぼうたるべし。日蓮がたましいをすみにそめなが

そろう

しん

たま

してかきて候ぞ、信じさせ給え。

(225 経王殿御返事 1633 ページ 5 行)

きようおうどのごへんじ

にちれん

魂

墨

染

流

そろう

しん

日蓮がたましいをすみにそめながしてかきて候ぞ、信じ

たま

ほとけ

みこころ

ほけきよう

にちれん

させ給え。仏の御意は法華經なり、日蓮がたましいは

なんみようほうれんげきよう

過

南無妙法蓮華經にすぎたるはなし。

225 経王殿御返事 1633 ページ 7 行

禍 てん わざわいも転じて幸いとなるべし。あいかまえて御信心を  
相 さいわ 構 ごしんじん  
い 出だし、この御本尊に祈念せしめ給え。何事か成就せざる  
ごほんぞん きねん たま なにごと じゆうじゆ  
ぐき。

225 経王殿御返事 1633 ページ 9 行

にちれん み 日蓮その身にあいあたりて、大兵をおこして二十余年なり。  
相 たいへい 当 起  
にちれん いちど 日蓮、一度もしりぞく心なし。  
退 こころ

(227 弁殿 並 尼御前御書 1635 ページ 7 行)

べんどのならびにあまごぜんごしよ

にちがつ ひがし

い

たま

だいち

はんぷく

日月は東より出でさせ給わぬことはありとも、大地は反覆

することはありとも、大海の潮はみちひぬことはありとも、

たいかい

しお

満

干

わ いし あ

こうが

みず

たいかい

い

破れたる石は合うとも、江河の水は大海に入らずとも、

ほけきよう しん

によにん

せけん

つみ

ひ

あくどう

お

法華経を信じたる女人の世間の罪に引かれて悪道に墮つる

ことはあるべからず。

(234 月水御書 1645 ページ 1 行)

がっすいごしよ

ほけきよう

ほんもん

かんじん

みようほうれんげきよう

さんぜ

しよぶつ

「この法華経の本門の肝心・妙法蓮華経は、三世の諸仏の

まんぎようまんぜん

くどく

あつ

ごじ

ごじ

うち

万行万善の功徳を集めて五字となせり。この五字の内にあ

まんかい

くどく

おさ

ぐそく

みようかい

に万戒の功徳を納めざらんや。ただし、この具足の妙戒は、

いちどたも

のち

ぎようじややぶ

やぶ

こんごう

一度持つて後、行者破らんとすれども破れず。これを金剛

ほうきかい

もつ

宝器戒とや申しけん」

(239

教行証御書

1676

ページー9

行)

きようぎようしようご(しよ

にちれん

でしとう

おくびよう

かな

日蓮が弟子等は臆病にては叶うべからず。

(239

教行証御書

1675

ページー17

行)

きようぎようしようご(しよ

道みちのとおきに心こころざしのあらわるるにや。  
遠とほ 頭かぶ

(241 乙御前母御書 1684 ページ17行)  
おとごぜんのははごしよ

犬いぬは師し子しをほわうれば腸はらわたくさる。修羅しゆらは日輪にちりんを射いた奉たまれば  
頭こうべ七分しちぶんに破わる。一切いっさいの真言師しんごんしは犬いぬと修羅しゆらとのごとく、  
法華經ほけきようの行者ぎようじやは日輪にちりんと師子ししとのごとし。

(242 乙御前御消息 1687 ページ17行)  
おとごぜんごししようそく

いくさ だいしやうぐん たましい たいしやうぐん 臆 つわもの  
軍には大將軍を魂とす。大將軍おくしぬれば、歩兵  
おくびよう  
臆病なり。

（242 乙御前御消息 1688 ページ14行）  
おとごぜんごしやうそく

ほけきやう によにん おん くら 灯 うみ ふね 恐  
法華経は、女人の御ためには、暗きにもしび、海に船、おそ  
ところ 守 由 誓 たま  
ろしき所にはまぼりとなるべきよし、ちかわせ給えり。

（242 乙御前御消息 1689 ページ6行）  
おとごぜんごしやうそく

みようらくだいし 宣 かなら こころ かた よ  
されば、妙楽大師のたまわく「必ず心の固きに仮つて、

かみ まも すなわ つよ とうろんぬん  
神の守り則ち強し」等云々。

おとごぜんごししょうそく  
(242 乙御前御消息 1689 ページ13行)

にちれん にほんこく かみいちにん しもばんみん いた ひひとり  
日蓮をば、日本国の上一人より下万民に至るまで一人もな  
くあやまたんとせしかども、今までこうて 候 ことは、一人  
なれども心のつよき故なるべしとおぼすべし。

おとごぜんごししょうそく  
(242 乙御前御消息 1689 ページ17行)

ひと ふね の せんどう 計 ごとく いちどう  
一つ船に乗りぬれば、船頭のはかり事わるければ一同に

せんちゆう しよにんそん  
船中の諸人損じ、また身つよき人も、心かいたければ多く  
の能も無用なり。

(242 乙御前御消息 1690 ページ12行)

いよいよ強盛の御志あるべし。氷は水より出でたれども、  
水よりもすさまじ。青きことは藍より出でたれども、  
かさぬれば藍よりも色まさる。同じ法華経にてはおわすれ  
ども、志をかさぬれば、他人よりも色まさり、利生もある  
べきなり。

おとごぜんごしようにそく  
(242 乙御前御消息 1690 ページ13行)

「身みは軽かるく法ほうは重おもし。身みを死ころして法ほうを弘ひろむ」とのべて候そうらえ  
ば、身みは軽かるければ人ひとは打うちはり悪にくむとも、法ほうは重おもければ必かなら  
ず弘ひろまるべし。

おとごぜんごしようにそく  
(242 乙御前御消息 1691 ページ7行)

そもそも、一人ひとりの盲もうもく目をあけて候そうらわん功徳くどくすら申もうすばかり  
なし。いわんや、日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゆじようの眼まなこをあけて候そうらわん

くどく  
功德をや。

おとごぜんごししようそく  
242 乙御前御消息 1691 ページ12行)

ほけきよう しん ひと ふゆ  
法華経を信ずる人は冬のごとし。冬は必ず春となる。

みよういちあまごぜんごししようそく  
244 妙一尼御前御消息 (冬は必ず春となるの事) 1696 ペー

ジー1行)

そ しんじん もう べつ そうろう め 夫 惜  
夫れ、信心と申すは別にはこれなく候。妻のおとこをおし  
むがごとく、おとこの妻に命をすつるがごとく、親の子を

捨

こ はは 離

ほけきよう

すてざるがごとく、子の母にはなれざるがごとくに、法華經、

しゃか たほう じつぼう もろもろ ぶつぼさつ しよてんぜんじんとう しん い

釈迦・多宝、十方の諸の仏菩薩、諸天善神等に信を入れ

たつまつ なんみようほうれんげきよう とな しんじん もう

奉って、南無妙法蓮華經と唱えたてまつるを、信心とは申

そろうろ

し候なり。

(245 妙一尼御前御返事 1697 ページー6行)

みよういちあまごぜんごへんじ

ひと じき ほどい みつ くどく いち いのち 繼 に

人に食を施すに、三つの功德あり。一には命をつぎ、二に

いろ 増 さん ちから ささ

は色をまし、三には力を授く。

(251 妙密上人御消息 1706 ページー11行)

みようみつしようにんごしようそく

いこんとう

きようもん

ふか

守

いつきよう

かんじん

だいもく

「已今当」の経文を深くまぼり、一経の肝心たる題目を、

われ とな

ひと

すす

あき

なか

よもぎ

すみ打

き

じたい

我も唱え、人にも勧む。麻の中の蓬、墨うてる木の、自体

しょうじき

じねん

す

きよう

は正直ならざれども、自然に直ぐなるがごとし。経のまま

とな

曲が

こころ

に唱うれば、まがれる心なし。

(251 妙密上人御消息 1710 ページ 2 行)

みようみつしょうにんごしょうそく

けんじん

もう

善

し

つた

ひと

しょうにん

もう

し

賢人と申すは、よき師より伝えたる人、聖人と申すは、師

な

われ

ごと

ひと

無くして我と覚れる人なり。

(251) 妙密上人御消息 1710 ページ 8 行

みようみつしょうにんごししょうそく

かみいちにん しもばんみん いた

上一人より下万民に至るまで、法華經の神力品のごとく、

ほけきよう じんりきほん

いちどう なんみようほうれんげきよう とな たも

一同に南無妙法蓮華經と唱え給うこともやあらんずらん。

はる とど

おも

木はしずかならんとおも風やまず、春を留めんとおも思

なつ

えども夏となる。

(251) 妙密上人御消息 1711 ページ 16 行

みようみつしょうにんごししょうそく

こがね 焼 いろ 勝 つるぎ 研

金はやけばいよいよ色まさり、劍はとげばいよいよ利く

と

なる。法華經の功德は、ほけきょう くどく 讚くどく ほむればいよいよ功德まさる。

(251 妙密上人御消息 1713 ページ 1 行)  
みょうみつしょうにんごししょうそく

ほとけ まこと どうと もの むかし とくしようどうじ すな

仏は真に尊くして物によらず。昔の徳勝童子は、沙の

もちい ほとけ くよう たてまつ あいくだいおう う いちえんぶだい

餅を仏に供養し奉つて阿育大王と生まれて、一閻浮提

しゆ ひんによ わ 頭 下 あぶら な

の主たりき。貧女の我がかしらをおろして油と成せしが、

しゆみせん ふ かぜ ひ 消

須弥山を吹きぬきし風もこの火をけさず。

(254 王日殿御返事 1716 ページ 7 行)  
おうにちどのごへんじ

ほけきよう いちじ だいち ばんぶつ しゅつしよう いちじ たいかい  
法華經の一字は大地のごとし、万物を出生す。一字は大海  
しゆる おさ いちじ にちがつ してんげ 照  
のごとし、衆流を納む。一字は日月のごとし、四天下をてら  
いちじへん つき つきへん ほとけ  
す。この一字変じて月となる。月変じて仏となる。

(254 王日殿御返事 1716 ページー11行)  
おうにちどのごへんじ

おん 宮 仕 思 ほけきよう いっさいせけん ちせい  
御みやづかいを法華經とおぼしめせ。「一切世間の治生  
さんぎよう みなじつそう あいはい  
産業は、皆実相と相違背せず」とは、これなり。

(256 檀越某御返事 1719 ページー1行)  
だんおつぼうごへんじ

だいなんきた

ごうじよう

しんじん

よろこ

大難来りなば、強盛の信心いよいよ悦びをなすべし。

(258 椎地四郎殿御書 1720 ページ 9 行)

しいじのしろうどのごしよ

ほけきよう

ほうもん

いちもんいつく

ひと

語

かこ

法華經の法門を一文一句なりとも人にかたらんは、過去の

しゆくえん

思

宿縁ふかしとおぼしめすべし。

(258 椎地四郎殿御書 1720 ページ 14 行)

しいじのしろうどのごしよ

そう

ぞく

あま

おんな

いつく

ひと

語

ひと

によらい

つか

僧も俗も、尼も女も、一句をも人にかたらん人は如来の使

み

いと見えたり。

しいじのしろうどのごしよ  
(258 椎地四郎殿御書 1720 ページ17行)

ろうやく たも によにんとう  
この良薬を持たん女人等をば、この四人の大菩薩、前後左右  
た 添 によにん 立 たま だいぼさつ ぜんごそう  
に立ちそいて、この女人たたせ給えば、この大菩薩も立たせ  
たも ないし によにんみち い とき ぼさつ みち い たも  
給う。乃至、この女人道を行く時は、この菩薩も道を行き給  
う。

みようほうまんだらくようじ  
(261 妙法曼陀羅供養事 1728 ページ3行)

そ ほけきよう こころ いっさいしゆじようかいじようぶつどう おんきよう  
夫れ、法華経の意は、「一切衆生皆成仏道」の御経なり。

しかりといえども、しん信ずる者は成仏をとぐ、ぼう謗ずる者は  
むけん無間大城に墮つ。お

(262 阿仏房尼御前御返事 1729 ページ 7 行)  
あぶつぼうのあまごぜんごへんじ

しんじんいよいよ信心をはげみ給うべし。たも 仏法の道理を人に語らん  
ぶつぼう

もの者をば、なんによそうにかなら男女僧尼必みずにくむべし。よしにくまばにくめ、  
ほけきよう法華経・しゃかぶつ釈迦仏・てんだい天台・みようらく妙楽・でんぎよう伝教・しやうあんとう章安等の金言きんげんに身  
によせつしゆぎよう

をまかすべし。「如説修行」の人とは、これなり。ひと

(262 阿仏房尼御前御返事 1730 ページ 14 行)  
あぶつぼうのあまごぜんごへんじ

あいかま あいかま ちから ほうぼう 責 たも  
相構えて相構えて、力あらんほどは謗法をばせめさせ給う  
にちれん ぎ たす たも ふしぎ おぼ そろろ  
べし。日蓮が義を助け給うこと、不思議に覚え候ぞ、  
ふしぎ おぼ そろろ  
不思議に覚え候ぞ。

(262 阿仏房尼御前御返事 1731 ページ12行)

まつぼう い ほけきょう たも なんによ 姿 ほか ほうとう  
末法に入つて法華経を持つ男女のすがたより外には宝塔な  
きなり。もししからば、貴賤上下をえらばず、  
なんみょうほうれんげきょう 唱 きせんじょうげ 選  
南無妙法蓮華経となうるものは、我が身宝塔にして我が

身みまた多宝如来たほうにょらいなり。

263 阿仏房御書 (宝塔御書)

1732 ページ15行

あぶつしょうにん いっしん ち すい か ふう くう ごだい  
阿仏上人の一身は地・水・火・風・空の五大なり。この五大  
は題目だいもくの五字ごじなり。

あぶつぼう ほうとう ほうとう ほうとう あぶつぼう  
しかれば、阿仏房あぶつぼうさながら宝塔ほうとう、宝塔ほうとうさながら阿仏房あぶつぼう、こ  
れより外ほかの才覚さいかく無益むやくなり。

263 阿仏房御書 (宝塔御書)

1733 ページ1行

きようもん いたさいきよう すぐ ちはし もの おう ししおう

この経文は一切経に勝れたり。地走る者の王たり、師子王

そらと もの おう

わし

のごとし。空飛ぶ者の王たり、鷲のごとし。

せんにちあまごぜんごへんじ しんじつほうおんぎよう こと

(265 千日尼御前御返事(真実報恩経の事) 1737 ページー11行)

にちれん がん にちれん まった あやま

ここに日蓮、願じて云わく「日蓮は全く誤りなし。たと

ひがごと

にほんこく

いたさい

にょにん

たす

がん

こころざし

僻事なりとも、日本国の一切の女人を扶けんと願ぜる 志

捨

はすてがたかるべし。

せんにちあまごぜんごへんじ しんじつほうおんぎよう こと

(265 千日尼御前御返事(真実報恩経の事) 1740 ページー13行)

くおんじつじよう　しやくそん　かいじようぶつどう　ほけきよう　われ　しゆじよう　みつ  
久遠実成の釈尊と皆成仏道の法華経と我ら衆生との三  
まった　さべつな　さと　みようほうれんげきよう　とな　たてまつ  
つ全く差別無しと解つて妙法蓮華経と唱え奉るところ  
しょうじいちだいじ　けつみやく  
を、生死一大事の血脈とはいふなり。

(276 生死一大事血脈抄 1774 ページ 17 行)

かこ　ほけきよう　けちえんごうじよう　ゆえ　げんざい　きよう　じゆじ  
過去に法華経の結縁強盛なる故に、現在にこの経を受持  
みらい　ぶつか　じようじゆ　うたが　かこ  
す。未来に仏果を成就せんこと疑いあるべからず。過去の  
しょうじ　げんざい　しょうじ　みらい　しょうじ　さんぜ　しょうじ　ほけきよう　はな  
生死、現在の生死、未来の生死、三世の生死に法華経を離れ  
き　ほつけ　けつみやくそうじよう　い  
切れざるを、法華の血脈相承とは云ふなり。

(276 生死一大事血脈抄 1775 ページ10行)

そう  
にちれん  
でしだんなとう  
じた  
ひし  
こころ  
すいぎよ

総じて、日蓮が弟子檀那等、自他・彼此の心なく、水魚の

おも  
な  
いたいどうしん  
なんみようほうれんげきよう  
とな  
たてまつ

思いを成して、異体同心にして南無妙法蓮華経と唱え奉

しょうじいちだいじ  
けつみやく  
い  
いま

るところを、生死一大事の血脈とは云うなり。しかも、今、

にちれん  
ぐつう  
しよせん  
こうせん

日蓮が弘通するところの所詮これなり。もししからば、広宣

る  
ふ  
だいがん  
かな

流布の大願も叶うべきものか。

(276 生死一大事血脈抄 1775 ページ14行)

しょうじいちだいじけつみやくしよ

金がね たいか や たいすい ただよ く くらがね  
金は大火にも焼けず、大水にも漂わず、朽ちず。鉄は

すいかとも た けんじん かがね ぐにん くらがね  
水火共に堪えず。賢人は金のごとく、愚人は鉄のごとし。

きへん しんきん ほけきよう かがね たも ゆえ  
貴辺あに真金にあらずや。法華経の金を持つ故か。

(276 生死一大事血脈抄 1776 ページ 3 行)

かこ しゆくえんお きた こんどにちれん でし な たも  
過去の宿縁追いかつて、今度日蓮が弟子と成り給うか。

しゃか たほう ごぞんちそうろう ざいざいしよぶつど じようよしぐしろう  
釈迦・多宝こそ御存知候らめ。「在々諸仏土、常与師俱生

しよぶつ ど つね し しよう  
(いたるところの諸仏の土に、常に師とともに生ず)」、よ

そらうじとそらうひ  
も虚事候わじ。

しょうじいちだいじけつみやくしょう  
276 生死一大事血脈抄 1776 ページー8行

あいかま

あいかま

こうじょう

だいしんりき

いた

相構えて相構えて、強盛の大信力を致して、

なんみょうほうれんげきようりんじゆうししょうねん

きねん

たま

しょうじいちだいじ

南無妙法蓮華経臨終正念と祈念し給え。生死一大事の

けつみやく

ほか まった もと

血脈、これより外に全く求むることなかれ。

しょうじいちだいじけつみやくしょう  
276 生死一大事血脈抄 1777 ページー1行

しんじん

けつみやく

ほけきょう

たも

むやく

信心の血脈なくんば、法華経を持つとも無益なり。

しょうじいちだいじけつみやくしょう  
276 生死一大事血脈抄 1777 ページー2行

にちれん ちしや

だいろくてん

まおう

わ み

い

日蓮、智者にあらずといえども、第六天の魔王、我が身に入

か

ようじんふか

み

寄

付

らんとするに、兼ねての用心深ければ身によせつけず。

さいれんぼうごへんじ

(278 最蓮房御返事 1780 ページー10行)

ほけきよう

ぎようじや

しんじん

たいてんな

み

さしんな

いっさい

法華経の行者は、信心に退転無く、身に詐親無く、一切

ほけきよう

み

まか

きんげん

しゆぎよう

法華経にその身を任せて金言のごとく修行せば、たしかに

ごしよう

もう

およ

こんじよう

そくさいえんめい

しようみよう

後生は申すに及ばず、今生も息災延命にして勝妙の

だいかほう

え

こうせんるふ

だいがん

じようじゆ

大果報を得、広宣流布の大願をも成就すべきなり。

（279 祈禱經送狀 1786 ページー15行）

しもじごく

かみぶっかい

じっかい

えしやう

とうたい

下地獄より上仏界までの十界の依正の当体、ことごとく

いっぽう

残

みようほうれんげきやう

相

一法ものこさず妙法蓮華經のすがたなり

（280 諸法実相抄 1788 ページー9行）

じっそう

みようほうれんげきやう

いみやう

しよほう

みようほうれんげきやう

実相というは、妙法蓮華經の異名なり。諸法は妙法蓮華經

じごく

じごく

相

み

じっ

すがた

ということなり。地獄は地獄のすがたを見せたるが実の相

がき

へん

じごく

じっ

ほとけ

なり。餓鬼と変ぜば、地獄の実のすがたにはあらず。仏は

ほとけ ぼんぷ ぼんぷ ぼんぼう とうたい  
仏のすがた、凡夫は凡夫のすがた、万法の当体のすがたが  
みょうほうれんげきょう とうたい しょうほうじつそう もう  
妙法蓮華経の当体なりということをも、諸法実相とは申すな  
り。

(280 諸法実相抄 1789 ページ 14 行)

じゆ ぼさつ 先 駆 きちれんいちにん じゆ ぼさつ かず  
地涌の菩薩のさきがけ日蓮一人なり。地涌の菩薩の数にも  
い きちれん じゆ ぼさつ かず い  
や入りなまし。もし日蓮、地涌の菩薩の数に入らば、あに、  
きちれん でしだんな じゆ るるい  
日蓮が弟子檀那、地涌の流類にあらずや。

(280 諸法実相抄 1790 ページ 10 行)

堪え ひろ もの ころも しゃかぶつ 覆 たも  
たえて弘めん者をば、衣をもつて釈迦仏おい給うべきぞ、  
しよてん くよう  
諸天は供養をいたすべきぞ、  
だいぜんこん もの  
ぞ、大善根の者にてあるぞ

(280 諸法実相抄 1790 ページ 16 行)  
しよほうじつそうしよ

ともかくも法華経に名をたて身をまかせ給うべし。釈迦仏・  
たほうぶつ じつぽう もろもろ ぶつぼさつ こくう にぶつ 額 あ  
多宝仏・十方の諸の仏菩薩、虚空にして二仏うなずき合ひ、  
さだ たま べち  
定めさせ給いしは別のことにはあらず。ただひとえに末法  
まっぽう

の令法久住の故なり。  
りようぼうくじゆう ゆえ

(280 諸法実相抄 1791 ページ 3 行)  
しよほうじつそうしよ

いかにも、今度、信心をいたして、法華經の行者にてとお  
こんど しんじん 致 ほけきよう ぎようじゃ 通

り、日蓮が一門となりとおし給うべし。日蓮と同意ならば  
にちれん いちもん たも にちれん どうい

地涌の菩薩たらんか。地涌の菩薩にさだまりなば、釈尊  
じゆ ぼさつ じゆ ぼさつ 定 しやくそん

久遠の弟子たること、あに疑わんや。  
くおん でし うたが

(280 諸法実相抄 1791 ページ 6 行)  
しよほうじつそうしよ

まつぼう

みようほうれんげきよう

ごじ

ひろ

もの

なんによ

嫌

末法にして妙法蓮華經の五字を弘めん者は、男女はきらう

みなじゆ

ぼさつ

しゆつげん

とな

べからず、皆地涌の菩薩の出現にあらずんば唱えがたき

だいもく

題目なり。

(280 諸法実相抄 1791 ページ 8 行)

しよほうじつそうしよ

にちれんいちにん

なんみようほうれんげきよう

とな

ににん

さんにん

日蓮一人はじめは南無妙法蓮華經と唱えしが、二人・三人・

ひやくにん

しだい

とな

伝

みらい

百人と次第に唱えつたうるなり。未来もまたしかるべし。

じゆ

ぎ

こうせんるふ

とき

これ、あに地涌の義にあらずや。あまつさえ、広宣流布の時

にほんいちどう

なんみようほうれんげきよう

とな

だいち

まと

は、日本一同に南無妙法蓮華經と唱えんことは、大地を的と

するなるべし。

(280 諸法実相抄 1791 ページ 10 行)  
しよほうじつそうしよ

凡夫ぼんぷなれば過去かこをしらず。現在げんざいは見えて法華經ほけきようの行者ぎようじやなり。

また未来みらいは決定けつじようとして当詣道場とうけいどうじようなるべし。過去かこをもこれ

をもつて推すいするに、虚空会こくうえにもやありつらん。三世各別さんぜかくべつある

べからず。

かくのごとく思おもいつづけて候そうらえば、流人るにんなれども喜悅きえつ

はかりなし。うれしきにもなみだ、つらきにもなみだなり。  
計無嬉涙辛

（280 諸法実相抄 1792 ページー2行）  
しよほうじつそうしよ

ほけきよ ぎよじや かの しゆくじゆう おな そうもく

法華經の行者となることは過去の宿習なり。同じ草木な

ほとけ 作 しゆくえん ほとけ ごんぶつ

れども仏とつくらるるは宿縁なるべし。仏なりとも権仏

しゆくえん

となるは、また宿業なるべし。

（280 諸法実相抄 1792 ページー5行）  
しよほうじつそうしよ

げんざい だいなん おも 続 涙 みらい じようぶつ おも

現在の大難を思いつづくるにもなみだ、未来の成仏を思つ

よろこ 涙 塞 敢 とり むし 鳴 涙

て喜ぶにもなみだせきあえず。鳥と虫とはなけどもなみだ

落 にちれん

泣

隙

世けん

おちず。日蓮はなかねどもなみだひまなし。このなみだ世間のことにはあらず。ただひとえに法華経の故なり。

ほけきょう ゆえ

(280 諸法実相抄 1792 ページ 11 行)

ぎょうがく

にどう

励

そうろう

ぎょうがく絶

ぶつぼう

行学の二道をはげみ候べし。行学たえなば仏法はある

われ

ひと

きょうけそうら

ぎょうがく

しんじん

べからず。我もいたし、人をも教化候え。行学は信心より

起

そうろう

ちから

いちもんいつく

語

たも

おこるべく候。力あらば一文一句なりともかたらせ給う

べし。

(280 諸法実相抄 1793 ページ 3 行)

しよほうじつそうしよ

ねむ しし て つ いか 眠れる師子に手を付けざれば瞋らず、流れにさおを立てざ  
なみた ほうぼう かしやく れば浪立たず、謗法を呵責せざれば留難なし。  
るなん

ぜんびく ほう やぶ もの み 「もし善比丘あつて、法を壊る者を見て、置いて、呵責せ  
お お お ずんば」の「置」の字をおそれずんば、今は吉し、後を御らん  
むけん じごく うたが ぜよ、無間地獄疑いなし。

なんぶのろくろうどのごしよ  
(283 南部六郎殿御書 1807 ページ11行)

かこ じゆうまん おく ほとけ くよう ひと にんげん う 過去に十萬億の仏を供養せるの人、人間に生まれて、この

ほっけ しん  
法華を信ぜん

(284 波木井三郎殿御返事 1813 ページー6行)  
はきいさぶろうどのごへんじ

だいぜん  
いかなる大善をつくり、法華経を千万部読み書写し、一念  
ほけきよう せんまんぶよ しよしや いちねん

さんぜん かんどう え ひと  
三千の観道を得たる人なりとも、法華経のかたきをだにも  
ほけきよう 敵

責 とくどう 有 難  
せめざれば得道ありがたし。

(296 南条兵衛七郎殿御書 1826 ページー12行)  
なんじょうひょうえしちろうどのごしよ

生 とき しょう ほっけ いま し ほっけ しょうじ ほっけ  
いきておわしき時は生の仏、今は死の仏、生死ともに仏

なり。即身成仏と申す大事の法門これなり。

そくしんじようぶつ

もう

だいじ

ほうもん

(297 上野殿後家尼御返事 1832 ページ15行)

うえのどののごけあまごへんじ

1832

ページ15行

夫れ、浄土というも、地獄というも、外には候わず。ただ

そ

じようど

じごく

ほか

そうら

我らがむねの間にあり。これをさとるを仏という。これに

われ

胸

あいだ

覚

ほとけ

まようを凡夫と云う。

迷

ぼんぷ

い

(297 上野殿後家尼御返事 1832 ページ17行)

うえのどののごけあまごへんじ

1832

ページ17行

法華経の法門をきくにつけてなおなお信心をはげむを、

ほけきよう

ほうもん

聞

しんじん

励

真

どうしんじや

もう

まことの道心者とは申すなり。

(297

上野殿後家尼御返事

1834

ページー1行)

うえのどののごけあまごへんじ

てんだい

じゅうらんにしよう

あい

あお

うんぬん

天台云わく「従藍而青（藍よりして、しかも青し）」云々。

しゃく こころ

藍

は

染

この釈の心は、あいは葉のときよりも、なおそむればいよ

青

ほけきよう

藍

しゆぎよう

深

いよあおし。法華経はあいのごとし、修行のふかきはいよ

青

いよあおきがごとし。

(297

上野殿後家尼御返事

1834

ページー2行)

うえのどののごけあまごへんじ

「かくれて隠の信しんあれば、あらわれて顯の徳とくあるなり」

305 上野殿御消息 (四徳四恩の事) 1850 ページー13行  
うえのどのごしょうそく しとくしおん こと

中ちゆう々たひとひとの、信しんずるようにてなめりて候そうろうえば、人ひとの  
信心しんじんをもやぶり候そうろうなり。

311 上野殿御返事 (梵帝御計らいの事) 1867 ペー10行  
うえのどのごへんじ ぼんたいおんはか こと

そもそも、今いまの時とき、法華経ほけきょうを信しんずる人ひとあり。あるいは火ひのご  
とく信しんずる人ひともあり、あるいは水みずのごとく信しんずる人ひともあり。

ちようもん

とき

燃

思

遠

聴聞する時はもえたつばかりおもえどもとおざかりぬれ

捨

こころ

みず

もう

退

しん

ばすつる心あり。水のごとくと申すは、いつもたいせず信

ずるなり。

314

上野殿御返事

(水火二信抄)

1871

ページー16行)

いま

まつぼう

い

よきよう

ほけきよう

栓

今、末法に入りぬれば、余経も法華経もせんなし、ただ

なんみようほうれんげきよう

もう

い

そうろう

南無妙法蓮華経なるべし。こう申し出だして候も

私

はか

しゃか

たほう

じつぼうしよぶつ

じゆ

わたくしの計らいにはあらず、釈迦・多宝・十方諸仏・地涌

せんがい

おんはか

なんみようほうれんげきよう

よじ

雑

千界の御計らいなり。この南無妙法蓮華経に余事をまじえ

ば、ゆゆしきひが事なり。  
僻 (いじ)

315 上野殿御返事 (末法要法の事)  
うえのどのごへんじ まつぼうようほう こと

1874 ページ13行

あくつ じごく 悪積もれば地獄となる、善積もれば仏となる。  
ぜんつ ほとけ 女人は嫉妬  
どくじや かさなれば毒蛇となる。法華経供養の功德かさならば、あに  
りゆうによ 竜女があとをつがざらん。  
跡 継

317 南条殿女房御返事  
なんじようどののにようぼうごへんじ  
1876 ページ7行

そもそも、日蓮、種々の大難の中には竜の口の頸の座と  
にちれん しゅじゆ だいなん なか たつ くち くび ざ

とうじよう なん

過

ゆえ

しよなん

なか

いのち

捨

東条の難にはすぎず。その故は、諸難の中には命をすつる

ほど だいなん

罵

責

ところ

程の大難はなきなり。あるいはのり、せめ、あるいは処を

追

むじつ

い

付

おもて

打

おわれ、無実を云いつけられ、あるいは面をうたれしなど

もの

数

しきしん

にほう

起

謗

は物のかずならず。されば、色心の二法よりおこりてそしら

もの

にほんこく

なか

にちれんいちにん

れたる者は、日本国の中には日蓮一人なり。

うえのどのごへんじ

とうじようなん

こと

324 上野殿御返事（刀杖難の事）

1888

ページー6行

ほけきよう

み

任

しん

たま

とのいちにん

とにかくに、法華経に身をまかせ信ぜさせ給え。殿一人に

限

しんじん

たま

かこ

ふぼとう

救

かぎるべからず、信心をすすめ給いて、過去の父母等をすく

わせ給え。たま

324 上野殿御返事 (刀杖難の事) うえのどのごへんじ とうじょうなん こと 1891 ページ16行

にちれん 日蓮、生まれし時よりいまに一日片時もこころやすきこと う とき いちにちかたとき 心 安

はなし。この法華経の題目を弘めんと思**う**ばかりなり。 ほけきょう だいもく ひろ おも

324 上野殿御返事 (刀杖難の事) うえのどのごへんじ とうじょうなん こと 1892 ページ1行

み かつて 食をねがい、渴して水をしたうがごとく、恋いて人 飢 じき 願 かつ みず 慕 こと ひと  
を み 見たきがごとく、病 やまい にくすりをたのむがごとく、 薬 頼

見目形ひと紅白物付

みめかたちよき人、べに・しろいものをつくるがごとく、

ほけきょう しんじん 到 たま こうかい

法華経には信心をいたさせ給え。さなくしては後悔あるべ

し

324 上野殿御返事 (刀杖難の事) 1892 ページ 6 行

願わくは、我が弟子等、大願をおこせ。

326 上野殿御返事 (竜門御書) 1895 ページ 10 行

とにかくに死は一定なり。その時のなげきはとうじのごと

し。おなじくは、かりにも法華経のゆえに命をすてよ。つゆ  
を大海にあつらえ、ちりを大地にうずむとおもえ。

326 上野殿御返事（竜門御書）  
1895 ページ10行

花は開いて果となり、月は出でて必ずみち、灯は油をさ  
せば光を増し、草木は雨ふればさかう。人は善根をなせば  
必ずさかう。

328 上野殿御返事（正月三日の事）  
1897 ページ13行

おなご もん 開

女子は門をひらく

うえのどのごへんじ ひわかごぜんたんじょう こと

331 上野殿御返事 (日若御前誕生の事) 1902 ページ 6 行

しやかぶつ われ むりよう ちんぼう おくごう あいだ

しかるに、釈迦仏は「我を無量の珍宝をもつて億劫の間

くよう まっだい ほけきよう ぎようじゃ いちにち くよう

供養せんよりは、末代の法華経の行者を一日なりとも供養

くどく ひやくせんまんおくばいす と たま そろろう

せん功德は百千万億倍過ぐべし」とこそ説かせ給いて候

なんじようどのごへんじ ほうみようにんき こと

340 南条殿御返事 (法妙人貴の事) 1923 ページ 15 行

ほうみよう ゆえ になたつと になたつと ゆえ ところたつと

法妙なるが故に人貴し。人貴きが故に所尊し

340 南条殿御返事 (法妙人貴の事)

なんじょうどのごへんじ

ほうみょうにんき

こと

1924 ページ 6 行

ひと ち たお  
人の地に倒れて、  
かえ  
還つて地より起くるがごとし  
ち お

345 法華証明抄

ほっけしやうみやうしやう

1931 ページ 1 行

ほとけ 成  
すでに仏になるべしと見え候えば、  
み そうら  
天魔・外道が病をつ  
脅  
けておどさんと心み候か。命はかぎりあることなり。す  
こころ そうろう  
驚  
こしもおどろくことなかれ。  
いのち 限

345 法華証明抄

ほっけしやうみやうしやう

1931 ページ 9 行

にちれん

ぶつぼう

試

どうり

しょうもん

過

日蓮、仏法をこころみるに、道理と証文とはすぎず。ま

どうり

しょうもん

げんしょう

過

た道理・証文よりも現証にはすぎず。

さんさんぞうきうのこと

(352 三三蔵祈雨事 1941 ページ 8 行)

そ

き

植

そうろう

おおかせ吹

そうら

強

助

夫れ、木をうえ候には、大風ふき候えども、つよきすけ

支

倒

もと

お

そうろうき

ね

をかいぬればたおれず。本より生いて候 木なれども、根の

よわ

倒

かい

もの

ものつよ

弱きはたおれぬ。甲斐なき者なれども、たすくる者強ければ

けな

もの

ひと

あ

道

たおれず。すこし健げの者も、独りなれば悪しきみちには

たおれぬ。  
倒

(352 三三蔵祈雨事 1940 ページ 6 行)  
さんさんぞうきうのこと

智者とは、世間の法より外に仏法を行わず。世間の治世の  
法を能く能く心えて候を、智者とは申すなり。  
ちしや せけん ほう ほか ぶつぽう おこな せけん ちせい  
ほう よ よ ころろ得 そうろう ちしや もう

(363 減劫御書 1968 ページ 12 行)  
げんこうごしよ

法華經の御心と申すは、これていのことにて候。外のこと  
とおぼすべからず。  
ほけきよう みころろ もう 体 そうろう ほか 思

大悪だいあくは大善だいぜんの来るきたべき瑞相ずいそうなり。

(363 減劫御書げんこうごしよ 1969 ページ4行)

大悪だいあくは大善だいぜんの来るきたべき瑞相ずいそうなり。一閻浮提いちえんぶだいうちみだすな乱  
らば、「閻浮提内えんぶだいな、広令流布こうりようるふ (閻浮提の内えんぶだいに、広く流布ひろるふせし  
む)は、よも疑うたがい候そうらわじ。

(363 減劫御書げんこうごしよ 1969 ページ4行)

聖人しょうにんの唱となえさせ給たもう題目だいもくの功德くどくと、我われらが唱となえ申もうす題目だいもくの

くどく ほど たししょうそうろう

功德と、いか程の多少候べきや」と云々。さらに勝劣あ

そうろう

るべからず候。

ゆえ

ぐしや

も

こがね

ちしや

も

こがね

その故は、愚者の持ちたる金も智者の持ちたる金も、

ぐしや

とも

ひ

ちしや

とも

ひ

さべつ

愚者の然せる火も智者の然せる火も、その差別なきなり。

まつのどのごへんじ

じゅうしひぼう

こと

374 松野殿御返事 (十四誹謗の事) 1987 ページ 8 行

むち もの

きよう

と

もの

つか

くどく

得

無智の者は、この経を説く者に使われて功德をうべし。い

きちく

ほけきよう

いちげいつく

と

もの

かなる鬼畜なりとも法華経の一偈一句をも説かん者をば

まさ

た

とお

むか

まさ

ほとけ

うやま

「当に起つて遠く迎うべきこと、当に仏を敬うがごとく

すべし」の道理なれば、どうり 仏のごとく互いに敬うべし。ほとけ たが うやま

374 松野殿御返事 (十四誹謗の事) 1989 ページ1行  
まつのだのこへんじ じゅうしひぼう こと

そもそも、ぶつぽう 「仏法をがくする者ものは大地微塵よりおおけれども、多 まことに仏になる人は爪上の土よりもすくなし」ほとけ 成 ひと そうじょう ど 少

385 三沢抄 2011 ページ1行  
みさわしよう

毒薬変じて薬となる。どくやくへん くすり 妙法蓮華経の五字は、みようほうれんげきょう ごじ 悪変じて善とあくへん ぜん なる。

（389 内房女房御返事 2033 ページ13行）  
うつぶさのにようぼうごへんじ

われ ころろ うち ちち 悔 はは 疎 ひと じごく  
我らが心の内に父をあなずり母をおろかにする人は、地獄  
ひと ころろ うち そうろう たと はちす 種 なか はな み  
その人の心の内に候。譬えば、蓮のたねの中に華と菓と  
見 のみゆるがごとし。 仏と申すことも、我らが心のおわ  
ほとけ もう われ ころろ うち  
します。 譬えば、石の中に火あり、珠の中に財のあるがご  
たと いし なか ひ たま なか たから  
とし。

（390 十字御書 2036 ページ12行）  
むしもちごしよ

ほけきよう

しん

ひと

幸

ばんり

そと

集

法華経を信ずる人は、さいわいを万里の外よりあつむべし。

かげ たい

しよう

ほけきよう

敵

ひと くに

影は体より生ずるもの。法華経をかたきとする人の国は、

たい 影

添

禍

きた

ほけきよう

しん

体にかげのそうがごとくわざわい来るべし。法華経を信ず

ひと

梅

檀

香

具

る人は、せんだんにこうばしさのそなえたるがごとし。

(390 十字御書 2037 ページ 9 行)

むしもちごしよ

こころ 疎

少

もの

真

ひと

たとい、心おろかに、すこしきの物なれども、まことの人

くよう

功 だい

こころ

に供養すればこう大なり。いかにいわんや、心ざしありて、

ほう

くよう

ひとびと

まことの法を供養せん人々をや。

393 衆生身心御書 2047 ページ 3 行  
しゅじょうしんしんごしよ

願ねがわくは、我わが弟子等でしとう、師子王ししおうの子ことなりて、群狐ぐんこに笑わらわる  
ることなかれ。過去遠々かこおんのんごう劫このかたより已来にちれん、日蓮しんみようがごとく身命しんみようを  
捨すてて強敵ごうてきの科とがを顕あらわす師しには値あいがたかるべし。難

394 閻浮提中御書 2048 ページ 13 行  
えんぶだいちゆうごしよ

いのちと申もうす物ものは、一切いっさいの財たからの中に第一なの財たからなり。  
「三千界さんぜんかいに遍満へんまんするも、身命しんみように直あたするもの有あることなし」

説

さんぜんだいせんせかい

満

そうろうたから

命

ととかれて、三千大千世界にみてて候 財も、いのちには

替

そうろう

かえぬことに候なり。

(397 白米一俵御書 2052 ページー9 行)

はくまいいっぴようごしよ

なむ もう

南無と申すはいかなることぞと申すに、南無と申すは天竺

もう

なむ

もう

てんじく

言葉

そうろう

かんど

にほん

きみよう

もう

きみよう

のことばにて候。漢土・日本には「帰命」と申す。帰命と

もう

わ

いのち

ほとけ

たてまつ

もう

申すは、我が命を仏に奉ると申すことなり。

はくまいいっぴようごしよ

(397 白米一俵御書 2052 ページー13 行)

ほとけ 成 そうろう

仏になり候ことは、凡夫は志と申す文字を心えて

ほとけ 成 そうろう

仏になり候なり。

ほんぷ こころざし もう もんじ こころ得

(397 白米一俵御書 2053 ページー5行)

にほんこく ひとびと

日本国の人々は、多人なれども、体同異心なれば、諸事成

たにん

たいどういしん

しよじじよう

難

にちれん

いちるい

いたいどうしん

ひとびと

ぜんことかたし。日蓮が一類は、異体同心なれば、人々すく

そうら

だいじ

じよう

いちじようほけきよう

広

なく候えども、大事を成じて一定法華経ひろまりなんと

おぼ

そうろう

あく

おお

いちぜん

勝

覚え候。悪は多けれども、一善にかつことなし。

いたいどうしんじ

(398 異体同心事 2054 ページー17行)

しよきよう ずいたい  
諸経は随他意なり。 仏、一切衆生の心に随い給う故に。  
ほけきよう ずいじい  
法華経は随自意なり。 一切衆生を仏の心に随えたり。  
ほとけ いっさいしゅじよう  
いつさいしゅじよう ほとけ こころ したが たも ゆえ

(399 新池殿御消息 2059 ページ 6 行)

ほけきよう しん  
たまたま法華経を信ずるようなる人々も、 世間をはばかり  
ひと おそ  
人を恐れて、 多分は地獄へ墮つること不便なり。  
たぶん じごく お ふびん  
ひとびと せけん 憚

(399 新池殿御消息 2058 ページ 15 行)

うれしきかな、末法流布に生まれあえる我らわれ。かなしきかな、  
こんどこんど きょうきょう しんしん ひとびとひとびと  
今度この経を信ぜざる人々。そもそも、人界に生を受くる  
者者 たれたれ むじょうむじょう まぬかまぬか  
もの、誰か無常を免れん。さあらんにとつては、何ぞ後世  
勤勤 のつとめをいたさざらんや。

(400 新池御書 2062 ページ 6 行)  
にいけごしよ

はじめはじめより終わりまで、いよいよ信心しんじんをいたすべし。さなくし  
こうかいこうかい たとたと かまくらかまくら きょうきょう じゅうにちじゅうにち  
て、後悔こうかいやあらんずらん。譬たとえば、鎌倉かまくらより京きょうへは十二日  
みちみち じゅういちにちじゅういちにち あまあま あゆあゆ 運運 いまいちにちいまいちにち な  
の道みちなり。それを十一日じゅういちにち余り歩あゆみをはこびて、今日いまいちにちに成な

あゆ 差 置  
つて歩みをさしおきては、何なんとして都みやこの月つきをば詠ながめ候そうろうべ  
き。

（400 新池御書 にいけごしよ 2063 ページ13行）

せつせん かんくちよう かんく 責  
雪山の寒苦鳥は、寒苦にせめられて、夜明よあけなば栖すつくらん  
な  
と鳴くといえども、日出ひいでぬれば、朝日あさひのあたたかなるに眠ねむ  
わす  
り、忘れて、また栖すをつくらずして一生虚しく鳴くことを  
得 いっさいしゆじよう  
う。一切衆生もまたまたかくのごとし。

（400 新池御書 にいけごしよ 2064 ページ8行）

この経きようの信心しんじんと申もうすは、少すこしも私わたくしなく、経文きようもんのごとくに、  
人ひとの言ことばを用もちいず、法華ほっけい一部いちぶに背そむくことなれば、仏ほとけに成なり  
候そうろうぞ。

(400 新池御書にいけごしよ 2067 ページー17行)

有解うげ無信むしんとて、法門ほうもんをば解さとつて信心しんじんなき者ものは、さらじようぶつに成仏じようぶつ  
すべうしんむげからず。有信うしん無解むげとて、解げは無なくとも信心しんじんあるものは、  
成仏じようぶつすべし。

(400 新池御書 にいけごしよ  
2068 ページ10行)

構かまえて構かまえて、所領しよりようを惜おしみ、妻子さいしを顧かえりみ、また人ひとを憑たのんであやぶむことなかれ。  
危

ただひとえに思おもい切きるべし。今年ことしの世間せけんを鏡かがみとせよ。そ  
こばくの人ひとの死しぬるに、今いままで生いきて有ありつるは、このこと  
に遭あわんためなりけり。

(404 弥三郎殿御返事 やさぶろうどのごへんじ  
2085 ページ6行)

にちれん

ふしぎ

そうろう

りゆうじゆ

てんじんとう

てんだい

日蓮、いかなる不思議にてや 候らん、竜樹・天親等、天台・

みようらくとう

あらわ

たま

だいまんだら

まつぼうにひやくよねん

妙楽等だにも 顕し給わざる大曼荼羅を、末法二百余年の

ころ

ほつけぐつう

旗

印

あらわ

たてまつ

比、はじめて法華弘通のはたじるしとして 顕し奉るなり。

にちによごぜんごへんじ

ごほんぞんそうみようしよう

(405 日女御前御返事 (御本尊相貌抄))

2086 ページ14行)

ごほんぞん

くよう

たてまつ

たも

によにん

げんざい

さいわ

かかる御本尊を供養し 奉り給う女人、現在には幸いを

招

ごしよう

ごほんぞん

そうぜんご

た

添

やみ

まねき、後生には、この御本尊、左右前後に立ちそいて、闇

ともしび

けんなん

ところ

ごうりき

え

に 灯のごとく、 険難の処に強力を得たるがごとく、かし

回

寄

にちによごぜん

囲

守

たも

こへまわりこへより、 日女御前をかこみまぼり給うべき

なり。

405 日女御前御返事 (御本尊相貌抄)

2087 ページ13行

この御本尊ごほんぞん全く余所よそに求むることなかれ。ただ我われら衆生しゆじよう

の法華経ほけきようを持って南無妙法蓮華経なんみやうほうれんげきようと唱となうる胸中きようちゆうの肉団にくだんに

おわしますなり。これを九識心王真如くしきしんのうしんによの都みやことは申もうすなり。

405 日女御前御返事 (御本尊相貌抄)

2088 ページ1行

曼陀羅まんだらというは天竺てんじくの名ななり。ここには、輪円具足りんえんぐそくとも功德くどく

聚じゆとも名なづくくるなり。

ごほんぞん

しんじん

にじ

納

この御本尊もただ信心の二字におさまれり。「信しんをもつて

入いることを得えたり」とは、これなり。

405 日女御前御返事 (御本尊相貌抄)

にちによごぜんごへんじ

ごほんぞんそうみようしよう

2088 ページ 3 行

にちれん

でしだんなとう

しやうじき

ほうべん

す

よきよう

いちげ

日蓮が弟子檀那等、「正直に方便を捨つ」「余経の一偈をも

う

むに

しん

ゆえ

ごほんぞん

ほうとう

なか

受けず」と無二に信ずる故によつて、この御本尊の宝塔の中

へ入いるべきなり。たのもし、たのもし。

405 日女御前御返事 (御本尊相貌抄)

にちによごぜんごへんじ

ごほんぞんそうみようしよう

2088 ページ 5 行

なんみようほうれんげきよう

とな

ほとけ

成

南無妙法蓮華経とばかり唱えて仏になるべきこと、もつと

たいせつ

しんじん

こうはく

も大切なり。信心の厚薄によるべきなり。

ぶつぼう

こんぽん

しん

みなもと

仏法の根本は信をもつて源とす。

にちによごぜんごへんじ

ごほんぞんそうみようしよう

(405 日女御前御返事 (御本尊相貌抄))

2088 ページー8行)

ほけきよう

きよう

たも

ひとびと

ほけきよう

ぎようじや

法華経をば経のごとく持つ人々も、法華経の行者を、ある

とん

じん

ち

せけん

いは貪・瞋・癡により、あるいは世間のことにより、あるい

品々

振舞

にく

ひと

ほけきよう

はしなじなのふるまいによつて憎む人あり。これは法華経

をしん信しんずれども信くどくずる功徳なし。かえりて罰ばちをか被ぼるなり。

406 日女御前御返事(囑累品等大意の事) 2093 ページ1行

聖人しょうにんをあ怨だめば、総罰一そうばちいつこく国にわたる。また四天下してんげ、また六ろく

欲よく・四禅しぜんにわたる。賢人けんじんをあてきじんとうだめば、ただ敵人等いまなり。今、

日本国にほんこくの疫病えきびようは総罰そうばちなり。定さだめて聖人しょうにんの国くににあるをあだ

むか。山やまは玉たまをい抱だけば草木そうもくかれず。国くにに聖人しょうにんあればその

国くにやぶれず。

406 日女御前御返事(囑累品等大意の事) 2094 ページ2行

にちによごぜん おんみ ないしん ほうとうほん

ほんぷ み

日女御前の御身の内心に宝塔品まします。凡夫は見ずとい

しやか たほう じつぼう しょぶつ ご 覧

にちれん

えども、釈迦・多宝・十方の諸仏は御らんあり。日蓮またこ

推 尊

れをすいす。あらとうとし、とうとし。

にちによごぜんごへんじ ぞくろいほんとうたいい こと

(406 日女御前御返事(囑累品等大意の事) 2096 ページー12行)

にちれんようしよう とき ぶつぼう かく そうち

ねんがん ひと

日蓮幼少の時より仏法を学し候いしが、念願すらく「人の

じゆみよう むじよう い いき いき ま

かぜ

寿命は無常なり。出ずる気は入る気を待つことなし。風の

まえ つゆ たと

賢

果 無

お

前の露、なお譬えにあらず。かしこきも、はかなきも、老い

たるも、わか若きも、さだ定め無き習いなり。ならされば、りんじゆうまず臨終の

ことを習つて後に他事を習うべし」  
なら のち たじ なら

(408 妙法尼御前御返事(臨終一大事の事) 2101 ページー11行)  
みようほうあまごぜんごへんじ りんじゆういちだいじ こと

法華経は実語の中の実語なり。ほけきよう じつご なか じつご真実の中の真実なり。しんじつ なか しんじつ

(408 妙法尼御前御返事(臨終一大事の事) 2102 ページー14行)  
みようほうあまごぜんごへんじ りんじゆういちだいじ こと

白粉の力は、漆を変じて雪のごとく白くなす。おしろい ちから うるし へん ゆき しろ須弥山に近  
づく衆色は、皆金色なり。しゆしき みなこんじき ほけきよう みようごう たも ひと いっしよう法華経の名号を持つ人は、一生

ないしかこおんのんごう こくごう うるしへん びやくごう だいぜん  
乃至過去遠々劫の黒業の漆変じて白業の大善となる。

況 むし ぜんこん みなへん こんじき そうろう  
いおうや、無始の善根、皆変じて金色となり候なり。

（408 妙法尼御前御返事（臨終一大事の事）2103 ページ1行）  
みようほうあまごぜんごへんじ りんじゆういちだいいじ こと

ほうぼう もう つみ われ 知 ひと とが おも  
謗法と申す罪をば、我もしらず、人も失とも思わず、ただ

ぶつぼう 習 たつと おも そうろう  
「仏法をならえば貴し」とのみ思つて候ほどに、この人 ひと

ひと 従 でしだんなとう むけんじごく お  
も、またこの人にしたがう弟子檀那等も、無間地獄に墮つる

ことあり。

（409 妙法比丘尼御返事2107 ページ7行）  
みようほうびくにごへんじ

しやかぶつ おんかたき  
釈迦じやく仏の御敵、いかなる智人・善人なりとも、必ず無間むけん  
地獄じやくに墮つべし。

(409 妙法比丘尼御返事 2112 ページ10行)  
みようほうびくにごへんじ

かな かな  
叶い叶わぬは御信心ごしんじんにより 候そうろうべし。 全まったく日蓮にちれんがとが失にあ  
らず。

(413 日嚴尼御前御返事 2135 ページ8行)  
にちごんあまごぜんごへんじ

みず澄 つき 映 かぜ吹 き 揺  
水すめば月うつる、風ふけば木ゆるぐごとく、みなみこころの御心は  
みず 濁 弱 潔  
水のごとし、信しんのよわきはしんじんにごるがごとし、信心しんじんのいさぎよ  
澄  
きはすめるがごとし。

(413) 日嚴尼御前御返事 2135 ページ 9 行  
にちごんあまごぜんごへんじ

じゆりようほん 徒 事 ねな  
寿量品なくしては一切経いつさいきよういたずらことなるべし。根無き  
くさ 久 源 かわ とお おやな こ  
草はひさしからず。みなもとなき河は遠とほからず。親無き子こは  
ひと 卑 せん じゆりようほん かんじん  
人ひとにいやしまる。詮せんずるところ、寿量品の肝心かんじん  
なんみようほうれんげきよう じつほうさんぜ しょぶつ はは おわ  
南無妙法蓮華経こそ、十方三世の諸仏の母ははにて御坐おわしまし

候え。

(421 寿量品得意抄 2143 ページー9 行)  
じゆりようほんとかいししよう

だいじ

しょうずい

だいあく起

だいぜん

来

大事には小瑞なし。大悪おこれば大善きたる。すでに、

だいほうぼう

くに

だいしょうほう

かなら

広

おのおの

大謗法、国にあり。大正法、必ずひろまるべし。各々なに

歎

たも

をかなげかせ給うべき。

(423 大悪大善御書 2145 ページー6 行)  
だいあくだいぜんごしよ

ごしよ

しんかん

そ

ごくりに

しでん

いとまあ

たいけ

御書を心肝に染め、極理を師伝して、もし間有らば台家を

聞くべきこと。き

(456 日興遺誠置文 2196 ページ 7 行)  
にっこうゆいかいおきぶみ

いまだこうせん 広宣流布せざる間は、身命しんみょう を捨てて随力弘通ずいりきぐつう を致いたすべきこと。

(456 日興遺誠置文 2196 ページ 9 行)  
にっこうゆいかいおきぶみ

時の貫首かんず たりといえども、仏法ぶつぽう に相違そうい して己義こぎ を構かま えば、これをもち 用いるべからざること。

(456 日興遺誠置文 2196 ページ 14 行)  
にっこうゆいかいおきぶみ

ほうおの  
ひろ  
法自ずから弘まらず、  
にんほう ひろ  
人法を弘むるが故に、  
ゆえ  
にんぼう  
人法ともに尊  
たつと

し。

(457 百六箇抄 2200 ページ 15 行)  
ひやくろっかしよう